プレイフォー

長滝凌埜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プレイフォー

【Ｎコード】
Ｎ２０９４Ｊ

【作者名】
長滝凌埜

【あらすじ】
人類が開発をし続けた結果、新種の生物や新しい装置、理論が展開された世界が構築された。
その世界の構築の過程で地上に残された都市の一つ『ヴァルカース』には行く宛の無い者達が集まり生活していた。
ヴァルカースの上空には時代の最先端を行く空中都市『コルスカンド』が存在していた。

空と地の接触。

地上都市に住む空中都市からの爪弾き者達は……

地上都市の人達の物語。

prologue（前書き）

この作品はフィクションです。
実在の人物、団体、事件などは、一切関係ありません。

prologue

人類は利便性を求め、新製品、新技術の研究開発の過程であらゆるものを犠牲にしてきた。それは鉱物や植物だけにとどまらず、動物や住み処である地球、果てには人間まで進化の糧にしてきた。

結果、大地は荒れ、大気中の埃のせいで、昔のような澄みきった空を見る事はできなくなった。さらには、環境に対応すべく進化した生物が餌を求め、人間の住む街を襲う事も頻繁におこるようになった。

生命の危機に瀕した人類は、まだ敵の少ない空へと安住の地を求めた。そして大都市は空中要塞とも呼べるものへと姿を変えた。

人々はこれからは誰もが安心して暮らすことができると思った。しかし、現実はそうではなかった。

政府が不要品を廃棄し始めたのだ。空中都市では、増えすぎたもの全てを所持するにはあまりにも小さすぎる。古くなった機械、使えないと判断された技術、犯罪者、政府の意に反する者、結果を出せない研究員まで。そうした者達は地へと落とされた。

地へと落とされた人々は生き残るために都市跡に集まり始めた。

都市跡には空中都市から捨てられた物が溢れ、生きるために必要なものは確保できた。地上にも少ないながらも植物が息衝き、動物達を食べれば生きていけた。

人々は毎日を精一杯生きた。空中都市がいつか潰えることを夢見ながら……。

時に流るる都市

いつの時代も時代の最先端を行く所が存在するもので、コルスカンドという空中都市がその役割を果たしていた。そこには、新しい技術を研究開発する施設サーキュリウルや、様々な人々の交流、主に貿易や都市間の会議などが行われる地区などが存在していた。

それ故に、コルスカンドを支配すればこの世界を支配したも同然といわれるほどで、世界はコルスカンドを中心に回っているといえた。その重要性から、幾つもの凶悪な対外兵器が標準装備され、世界最大の軍隊が組織されていた。

その下にはヴァルカースという名の極貧都市があった。そこは決して住みにくいわけではない。どちらかといえば、都市の位置だけを見ればベストポジションだといえる。

北には大きな山があり、季節ごとに様々な食材を提供してくれるし、更には冬の寒い風を防いでくれる。東にある樹海には、食用となる生物が沢山住み着いているし、南に流れている大きな川のおかげで、水に困ることもない。

だが、どうしても利便性を考えると、どうしても生きづらくなってしまう。その理由はコルスカンドの下にあるということである。コルスカンドは最先端を行く都市なので、多少古い製品でも地方都市へと輸出されれば、最新の製品として十分通用してしまうのだ。

だからコルスカンドは廃棄物がどうしても少なくなってしまい、屑鉄や新しい技術の収集が出来ない。

技術の遅れは今の人類にとって致命的なのである。

▽

陽も大きく傾いてきた時間に、夕陽をバックに歩いてくる少年がいた。
少年はひどくやつれていて、身に着けている細かい銀色の装飾のある上着や、裾が地面を擦っているズボンはボロボロだ。
少年は腕輪型の情報端末を作動させた。腕輪が光を放ち、空中に沢山の文字の羅列を浮かび上がらせ、地図を作り上げた。
「げっ、後三キロもある」
少年は肩を落とし、脚を引きずり歩き始めるが、二、三歩進むとジジジ・・・という音がして腕輪が光を失った。
「エネルギー切れとかサイアク……。それにしても、腹減ったー！」
少年の叫びは夕陽と共に沈んでいった。

少年がヴァルカースへと到着したときには、満月が夜空のてっぺんに到達していた。瓦礫の山に挟まれた道の真ん中を歩く少年は道端から多くの目を集めた。
「この服だとやっぱり目立つか」
そう自分の服を見ながら呟いた。好奇の視線を浴びながら歩いていると、道の端の瓦礫の洞穴の前に、果物が陳列されているのが目に付いた。自分の中の良心が何かを訴えるも、五日間、何も食べてないことによる空腹に耐えかね、一番端に置いてあった赤い果実へと手が伸びる。
果実を掴むと、少年よりもボロボロな服の老人が声を張り上げながら奥から出て来た。少年はせっかく手に入れた食料を落とさないように、大事に両手で包み込み、思いっ切り走り出した。前だけを見て、一心不乱に走った。
しばらく走りつづけ、ふと後ろを見たときには、老人は小さくなっていた。
老人の視界から逃れるために、十字路を左に曲がった。

その瞬間、衝撃を受け手の中から果実が消えた。尻餅をついた事で、誰かにぶつかった事を把握した。
少年が顔を上げるとそこには、薄いオレンジのレンズのゴーグルを付けている男が立っていた。男は地上都市の人間とは思えなかった。なにせ綺麗すぎるのだ。ダークグリーンの膝まである上着に、黒い長ズボン。小綺麗な茶色いブーツを履いて、腰には様々なホルダーをつけている。
「イリヤ、そいつは泥棒だ」
先ほどの老人が、二人に向かって走りながら掠れた声で言った。イリヤと呼ばれた男は、果実を一瞥し、それから少年を見た。その時イリヤの口元が引き攣った。
「見ない顔だな、ガキ」
少年はイリヤに背中を向けて逆方向に走り出したが、数メートルも行かない内に腕を捕まれた。イリヤは少年の両の手に、ホルダーから取り出した拘束用の手錠をかけたが、少年は逃れようと暴れ続ける。イリヤは溜息をついてから押し倒した。少年が立ち上がれないのを見て，地面の果実を拾い上げ上着の裾で拭き始めた。
拭き終えたところで、老人が息を切らしながら歩いてやってきた。
「大事な商品に傷はついてないみたいだ」
イリヤは老人の手に果実を置いた。
「助かったよ、イリヤ。昨日から泥棒続きで困ったもんだよ。さぁ、そいつを渡してくれ」
老人がイリヤ越しに少年をのぞき込むのを両手を前に出して制する。
「まあまあ、見たところこのガキは、堕ち人だ。まだ堕ちたてほやほやだ。
空中都市下の事はよく分かってなさそうだし、今日のところは俺が引き受けるって事でさ。な、盗られた物も大丈夫だったし、頼むよ」
「イリヤがそういうなら……仕方ない次はないぞ！」

老人は少年を怒鳴り、渋々帰っていった。
「さてとガキ、いつまで座ってる気だ？」
少年はゆっくりと立ち上がった。
「話を聞かせてもらうぞ」
イリヤは少年の尻を蹴り上げ、歩くよう促した。
時折、イリヤの八つ当たりで蹴られながら歩いていると、ある瓦礫の洞穴の前までやって来た。少年は瓦礫の山の中に入るのに怪訝そうな顔をした。
穴の中は意外にも清潔だった。外は瓦礫に覆われているのに中は普通の家と変わらず、一昔前に流行った金属製のドームがいくつも連なっている構造で、居住スペースとなっているようだ。
その中でも一番奥の部屋へ連れられ、手錠を外されそこにある牢に入れられた。
「何でこんなとこに入れんだよ！」
イリヤはゴーグルを上げて話し始めた。イリヤの目は左右の色が異なっていた、右目は琥珀色（アンバー）、左目は濃褐色（ブラウン）。
「……オッドアイ」
「それはどうでもいい、話しを聞かせてもらうぞ、ガキ」
「ガキじゃない！」
「聞かれたことだけに答えればそれで良い。まず名前は？」
「ディルク。ディルク・オズボーン」
「お前のその服装、堕ち人だな。どこの空中都市にいた？」
「コルスカンドだ」
「この上から真っ逆様に落とされたのか。なんだ、万引きでもしたか？」
「そんな事、誰がするか」
「さっきのは万引きじゃないって言うのか？」
イリヤが目を細め、ニヤニヤしながら尋ねた。ディルクが言葉を詰まらせたのを見て、イリヤは質問を再開した。
「コルスカンドでは何をしていた」

「学生だよ」
「学生……ねぇ。頭悪そうなのに」
「何だと！　これでも試験の成績は一番だったんだ。マトモに勉強してない地上の奴にバカにされてたまるか」
「コルスカンドも学習要領が随分変わったみたいだ。真っ先に教えるはずの目上の人の敬い方ってのが全然なってない」
ディルクは意味をなさない言葉を発し暴れ始めた。
「今日はこれくらいにしておくか」
イリヤは部屋の電気を消し、部屋をいくつかまたぎ地下にある食料保管庫への階段を降りた。
いつもならすぐに終わるハズの夜間パトロールが、予定外の犯罪者のせいで長引いてしまったため、未だ夕食を食べれていなかったからだ。
降りて一番近い棚からパンを、適当に山積みにされている野菜から生で食べてもさしあたりのない物を一つ二つ、吊してある干し肉を三枚。唯一錠のついている扉を、ホルダーから出した鍵を使って開け、中から小さい酒瓶を取り出した。
両手に食料を抱えて階段を上がり居間に行き、机の上に食料を置き、バネの固いソファーに腰を下ろした。瓶の蓋を開け、そのまま口に運び一口酒を含んだ。ホルダーからナイフを取り出し、パンを二枚に切り分け、野菜をパンに合わせてざっくりと切る。そして、干し肉と一緒にパンに挟みこんだ。
それを食べようとした時に、目の前に白衣で眼鏡をかけた老人（正確には立体映像だが）が立っているのに気付いた。
「わしにも酒を飲ませてくれてもいいじゃないか」
「年だから酒は控えろ。全く何で自分の家で、酒を鍵をつけてまで保管しないといけないんだろうな、ハンス？」
「わしが飲むのを許可すれば鍵を掛ける必要はなくなるぞ？」
「で、何の用だ？　いつもならこんな時間に話し掛けて来ないだろ」
「特に用はないと言いたいんじゃが、そうじゃない」

「材料不足か？」
「資源はいくらあっても足りないくらいじゃが、そうじゃない、今日連れて帰ってきた少年の事じゃ。イリヤ、彼をどうするつもりじゃ？」
「明日また話をして、期限をどうするか考えるつもりだが、確実にこの街への立ち入りは禁止にはするつもりだな、無期限にするつもりはないが」
「出来ればそれはやめてくれんか？」
「何故？　犯罪行為をする奴を滞在させとくと、治安が悪くなるだけなのは知ってるだろ。
　それなりの理由を聞かせてもらおうか？」
　ハンスは下を向き、少し躊躇った後、声を出した。
「彼をモニターにするのじゃ」
「モニター？　いつも俺がやってるじゃないか」
「それはイリヤ用にチューンアップした物ばかりじゃ。技術者としては、やはり万人に使える物を作らねば意味がないじゃろう」
　どう考えたっておかしい。
　モニターなら金を払って街の奴にやらせればいい。人には滅多に頭を下げないハンス（立体映像だが）が頭を下げているということは相当な事だろう。
「……好きにしろ。ただし、モルモットの面倒はちゃんと見ろよ。夜はちゃんと檻に入れて、排泄物もちゃんと片付けて、飯は自分で取りに行かせて、あとは……」
「解ってないみたいじゃから言うが、彼は人間じゃぞ」
「で、どっちが伝える？」
「わしが伝えておこう。檻の鍵は開けといてくれ」
「了解」
　ハンスはそれを聞くと立体映像の電源を落とした。

時に流るる都市（2）

翌朝、冷たい風に首筋をなでられ、ディルクは目を覚ました。固い床に寝かされたおかげで体のあちこちが軋んだ。

檻の入口の方を見ると、見覚えのある赤い果実が置かれていた。それを見ると腹の虫が鳴き、自然と手が伸びた。吸い込まれそうな甘美な香りを放ち、表面の光沢は磨けば磨くほど増し、今まで食べたことのないくらいおいしそうな物に見えた。大きく口を開き、ガブリと食らいつく。

「酸っぱっ！」

ディルクは思わずそれを吐き出し、備え付けられている蛇口をひねり口の中を漱いだ。

「それは口には合わなかったか？」

顔を上げると檻の中に白衣の老人が立っていた。

「誰だ？　どうやって中に入った？」

「わしはハンス・シェルマン。この家にイリヤと共に住んでおる。このわしは立体映像だがな。

それは原始的なリンゴで酸味が強く、ここではポピュラーな栄養源として食べられておるんだが、空中都市の改良された甘味のあるリンゴを食べ慣れとると食えんか。

それを食べられんとなるとここでの生活は苦しいから、食べられるようにならんとなぁ」

長々と話すハンスに呆気に取られたが、ふと頭をよぎった事がある。

「どうしてここに来たんだ？」

「本題じゃが、お前さんがここで暮らしてもいいことになった。ただし、わしの研究の為じゃ」

「人体実験か？」

ディルクが恐る恐る聞いたが、ハンスはそれは笑いながら否定した。
「モニターとしてじゃ。わしは一端の技術者だから、モニターをしてくれる人を捜していたのじゃ。モニターを引き受けてくれるなら、ここで暮らせる。どうじゃ、悪い取引ではなかろう？」
「……わかった。」
「檻の鍵が開いとるはずじゃ。わしについて来てくれ」
ハンスが檻の外に出て行くのに続いて、檻の扉に手を掛けた。

ガチャン。

「ハンス、開かないぞ？」
ディルクは扉を前後に揺らすが、ガチャガチャ音をたてるだけで開きはしない。
「ちょっと待っとれ、イリヤを呼んでくる」
そう言ってハンスは姿を消した。

▽

呼び鈴が鳴り響き来客の存在を告げた。イリヤは寝ぼけ眼を擦りながら玄関の扉を開けた。
「おっはよー、イリヤ！！」
「早いな、レア。まだ準備できてないからちょっと待ってろ」
「待ってる、待ってるー」
呼び鈴を押したのは少女だった。少女は名をレア・ハンゼンという。レアは銀色のショートカットの髪をしており、左目に白い眼帯を付けていて、右目は緑色（グリーン）。肌は日に焼けており、胸は年相応といったところか。

なにかとテンションの高いレアは勝手に居間のソファーに腰掛けていた。イリヤはコップにリンゴのジュースを注ぎ入れ、レアの目の前に置いた。
「それ、飲みながら待ってろ。くれぐれも、動き回るんじゃないぞ」
レアは手を挙げ大きな声ではーいと返事をし、コップを両手で持って飲み始めた。イリヤが準備をしようと動き始めたら、後ろから声がかかった。
「イリヤ、檻の鍵を開けておいてくれと言ったじゃないか。……ん？　レアが来ているのか」
「おはよっ、おじいちゃん」
「ああ、おはよう」
レアは右手を小さく振り、ハンスはそれに軽く微笑むことで応えた。
「今から開けようと思ってたんだ」
イリヤは檻の鍵をポケットから取り出し、ハンスの後ろを着いていった。
檻の前に行くと、ディルクが不機嫌そうな顔で座っていた。
「……遅い」
ディルクはボソッと不機嫌を隠さずに呟いた。
「文句があるなら出さないぞ」
イリヤが手に持っていた鍵をポケットに入れようとした。
「イリヤ、ふざけるんじゃない」
ハンスに怒られイリヤはしぶしぶ鍵を開けた。ディルクは檻から出ると、腕を上に思いっきり上げ伸びをした。
「で、何をすればいいんだ？」
ディルクはハンスに尋ねた。
「取り敢えず、付いて来てくれ、イリヤもな」
「何で俺まで……」
ハンスの実験室の横にある物置に着くと、ハンスは棚にある黒い箱二つを指差した。

「あの箱を取ってくれ。中には新しく作った、身体強化ユニットが入っておる。右の装飾がある方がイリヤのじゃ」
イリヤは黒い箱をディルクに渡し、装飾のある箱をその場で開いた。中には、鈍く銀に光る四つのリングとオレンジのゴーグル、手のひらサイズの　情報表示端末（インバース）が入っていた。
「それは部分強化用じゃ。リングを付けた箇所を強化する。ニュートラルなら両手両脚に一つずつじゃな。情報表示端末は腕に着けておくといい」
イリヤは言われた通りに装着し、ゴーグルを新しい物へと着け変えた。悪くない。しかし、まだ完全とはいえないか。……次に期待しよう。
イリヤは特殊なゴーグルの性能を調べ終え、ハンスへと振り返った。
「ダメだな。用がこれだけなら、俺は出るぞ」
「なぁ、オレにはゴーグルないのか？」
「手間を取らせて悪かったの」
「なぁ、ゴーグルは？」
「帰りは出来るだけ早くするつもりだ。行ってくる」
「……ゴーグルは無いんですか？」
ディルクは肩を落とした。

時に流るる都市（3）

イリヤはガレージへ愛車を取りに向かった。
そこには大型のバイク型と大型の搬送用の車両が置いてあった。イリヤは全体的に赤褐色で統一されているサイドカーが取り付けられているバイク型のものを作動させた。ガレージ内に独特の高音を響かせ浮かび上がる。
それは十年程前に拾ったバイクをハンスが改良したもので、空ではなく地上を走るために磁性ユニットを取り付け、磁力の斥力で浮遊し走行する。空を飛べない代わりに、地面と一定の距離を保ち続ける事が出来るので、悪路が多い地上では磁性ユニットが主流となっている。
イリヤはサイドカーに三つのケースを積み込んだ。そして、バイクに跨ると玄関へとバイクをまわし、レアを呼びに行った。
「レア、準備が出来たから行くぞ」
レアはハーイと返事をし、奥から走ってやって来た。続いてハンスもやって来た。
「イリヤ、ついでにディルクも連れてってやってくれ」
「何で？」
「命の保障さえしてくれれば、好きにしてくれて構わん。駄目か？」
「……分かった」
「じゃあ、よろしく頼むよ」
「ああ」
ハンスは姿を消し、その後からディルクが現れた。
「レア、先に乗っててくれ。お前は付いて来い」
イリヤはガレージへと戻った。
「……どこにしまっといたかな？」
イリヤは頭を掻き、乱雑に積まれている荷物の山に頭から突っ込

んだ。
　しばらくガサガサと埃を巻き上げていたが、ついに頭を出し、一枚の板を手に持っていた。
「ホバーボードに乗ったことはあるか？」
「ホバーボードって、遊ぶアレ？」
「そうだ、そのアレ」
　ホバーボードは一見ただの板切れだが、反重力装置もしくは、磁力で宙に浮いており、地面を蹴ると進み、一定の周期でブームになる、空中都市の遊び道具である。更に推進装置を付けることで、空中の移動を自由にする事が出来る。
「乗ったことはあるけど、トリックは出来ない」
「誰も、お前にトリックを披露してもらおうなんて考えてない」
　イリヤはホバーボードと黒い紐を持ちガレージをあとにした。
　家の前に戻ると、バイクに跨がったレアが退屈そうに欠伸をしていた。
「イリヤ、その人、誰？」
「こいつは昨日落ちてきた奴だ」
「本当に！？　わたしはレア。よろしくね」
「ディルクだ。こっちこそよろしく」
「挨拶なんていいから行くぞ」
「ハーイ」
　イリヤはサイドカーに先程の黒い紐を結び付けると、ディルクの脚をホバーボードに固定するように言った。
「いいか？この紐を絶対に放すなよ。放したら死ぬぞ」
「え？」
　困惑するディルクに紐を押し付け、ディルクはバイクに跨った。バイクが推進装置特有の高音を奏で始めた。イリヤはゴーグルをレアに着けるように促し、ゆっくりと発進させた。バイクはどんどん速度を上げ、時速百五十キロでスピードを維持した。
「イ、イリヤッ、速すぎーっ！」

ディルクが目を開けていることが出来ず、悲痛な叫びを上げたがイリヤ達の耳には届かなかった。ディルクは紐をギュッと握り直した。

▽

ヴァルカースの北に位置するグリフェンスバーク山脈の麓でバイクは停止した。バイクから降りたイリヤにディルクが噛み付いた。
「オイ、イリヤ！　死ぬとこだったじゃないか」
「死んでたな、手を放してたら」
「法定速度って言葉知ってるか？」
「知ってはいるが、地上（ココ）にはそんなものない。地上は秩序の無い世界だからな」
ディルクは歯軋りをして唸り始めた。
「レア、ケースを全部下ろしてくれ」
イリヤはレアに運ばせたケースを全て開き、中からナップサックを取り出し、必要な物を適当に詰め込み、ディルクに投げた。
「ここからはお前と俺達は別行動だ。必要になりそうなものは粗方入れておいた。それと……」
イリヤは腰に付けていたホルスターを外し、ディルクに渡した。
「何かあったら使え。弾は入ってるだけしか無いから、無駄撃ちはするな」
それだけ言い残し、イリヤはケースを持ちレアを連れて山の中へと入っていった。
「たく、滅茶苦茶な奴だな」
こんな所に置き去りにするなんて信じられない。ディルクはホルスターを腰に付けナップサックを担ぎ、山の中に入っていく。
木が鬱蒼と生い茂り、ぬかるんだ地面にはたくさんの大小様々な

動物の足跡が残されていて、陽光が注ぐ所には我先にと植物達が葉を伸ばし、貴重な光を浴びようとする。ディルクは近くにある木から小さな赤い実をもぎ、口の中に放り込んだ。が、すぐに吐き出した。

「これも酸っぱいな」

ディルクはこれも必要な食糧だと思い、ナップサックから取り出した折り畳み式の籠に幾つか投げ入れた。そしてまた奥へ奥へと、歩みを進めていった。

その後を茂みを揺らしながら、何かがついていったのを彼は知らない。

▽

「ねぇイリヤ、さっきの子、一人にしちゃって良いの？　あの子、噂の堕ち人でしょ。まだ地上の事、何も知らないんじゃないの？」

レアがイリヤのポケットから顔を出している小さな翼の生えているオナガトビネズミを見ながら尋ねた。

「大丈夫だろ。食べられるものは麓の方にしか無い。いくら無知でも、獰猛な奴らがいる山頂の方は、危ない雰囲気を出してるから流石に行かないだろ」

「それもそうだね。あれ、タクトがいない」

レアは両手に一匹ずつ、オナガトビネズミのショウとリオンを握りながら、二匹の子どものタクトを探し始めた。

「そこら辺にいるだろ？　アイツは寂しがり屋だから親から離れたがらない。

ショウ、ディルクの様子を見てきてくれ」

イリヤはショウをレアから取り上げ、空へと放った。

空へと二、三度はばたき姿を消したのを確認して、荷物を持ち上

げ歩き始めた。その後をレアがついて行った。

▽

射し込む光がわずかに傾き、背中の籠の中も色とりどりの木の実に満たされてきた。ディルクはナップサックから鉈を取り出し、手近な細い木を切り倒しそれに腰掛ける。

ナップサックから小さな箱に入れられたサンドイッチを取り出し口に運ぶ。

「……ん、まだましな味だな」

あっという間に平らげた一片のサンドイッチは空っぽのお腹には十分だった。デザートとして、収穫した中でも比較的甘めの果実をかじった時に、葉がざわめく音を聞いた。

音のした方へ振り向くとそこには、二足で立つ熊がいた。普通の熊とは違う熊。大きさは目測で二・五メートル、左右で非対称な不格好な長い腕に大きな鋭き爪。

焦げ茶色の毛で覆われた大きな体躯どおり、通ってきたであろう道は、木の枝が折れ爪跡が残っていた。

ディルクは数歩後ずさりし、ホルスターの留め具を外しリボルバータイプの銃を覚束ない手で構える。銃身が震え、照準もままならない内に引き金を引く。

カチッ。……カチッカチッ。

「えっ、何で……弾が、あれ？」

右手の向きを変え、銃を上から下から全体を無意味に観察する隙に、熊は体躯の三分の一程もある右の爪を振り下ろす。とっさに身を伏せ、軌道から急所を逃すと、空を裂いた爪は触れた木は勿論、僅かに触れなかった木にまで傷を付けた。

ディルクは血の気が引いたのを感じ、ナップサックを引ったくり、

無我夢中に来た道を引き返した。熊は自らの爪を前盾とし障害をものともせずに、その体躯では想像できない速さで追ってくる。ディルクはナップサックを漁り身を守る方法を模索しながら逃げ続けた。

▽

「……反応した」
イリヤがそう小さく呟いたのを、レアがすかさず疑問符付きで繰り返した。
「ショウに付けてるレーダーに飛行物が幾つか反応した。五、いや六機か」
イリヤがゴーグルの中に映し出された分布図を見て言った。
「見たところ空賊。貿易船狙いだから物資調達の良い機会だ」
イリヤはレアの手を引きレーダーの示した山頂の方へと向かった。
「イリヤ、ケースがブルブルしてる」
レアは突然の振動をイリヤへと伝え、ケースを投げつけた。
「投げるな、ばか」
イリヤ投げつけられたケースを片手で軽々と受け止め、地面へ置き中身を漁った。そして目的の銀色の小さな丸い物体を手に取り振動を止めた。
「何、今の？」
「第一撤滅群（ファースト・クラスター）が始動した合図。要するに、危ないから離れろって事」
頭に疑問符が浮かんでいる少女に分かり易い説明を付け加える。
「危ないの？」
「此処じゃないから大丈夫だ」
「じゃあ、おこぼれを貰いに行こっ！」
レアは爛々と輝かせた目で先へと進んでいった。
「……アイツに何かあったな」

▽

ディルクが無我夢中で走っているその前から、迷彩色の小さな蠢く集団が迫ってきた。それらは小さな楕円形に六本の足を生やし、その体の上に上に細長い筒が付けられている。大袈裟に例えるなら、迷彩色のゴキブリが群を成しこちらに向かっている、といった感じである。

「保護対象を確認。攻撃対象を確認するまで待機」

突然の機械的な音声に体をビクリと硬直させた隙に、周りを迷彩ゴキブリに囲まれてしまった。数秒の後に熊が木を薙ぎ倒し、その巨体を現した。

「攻撃対象を確認。両翼を展開し動きを制限」

その瞬間に、周りを囲んでいた迷彩ゴキブリは熊の前方を塞ぐ壁となり、上部の筒より弾丸を射出し攻撃を開始した。

いきなりの弾幕にも熊のスピードは僅かに衰えただけで、血しぶきを上げながら迫り来る。熊がそのままゴキブリの壁に突っ込んだ。するとその体躯に触れた迷彩ゴキブリは爆発した。

炎を伴わない衝撃だけの爆発。爆発というよりは周囲を巻き込む威力の破裂。それが熊の毛が触れた全ての迷彩ゴキブリで起こり、熊を後退させ、更には巨躯を宙に浮かしたのだ。

周囲のゴキブリは衝撃で隊列を崩すも、壊れてはおらず、直ぐに後方のゴキブリと合流し先ほどの壁を再形成した。

体中に穴を開け周囲を赤く染めながら、迷彩色の壁を崩そうと突進するのを繰り返し早数十回、ディルクの顔は先ほどの緊張した面持ちではなくなり、不安と安堵が混じった顔をしていた。

一回一回の間隔は一定だが、壁の被接触面積はだんだんと小さくなっている。一方、弾幕は衰えを知らず、遂には熊の動きを止めた。

「……や、やった？」
ディルクは迷彩の壁から顔を覗かせ、熊の様子を確認した。すると突然、ナップサックから一匹の翼の生えたネズミが飛び出し熊の方へとフラフラと飛んでいった。
「えっ……お前危ないって、おい。こっち戻って来いってば」
ディルクは壁から離れ、ネズミを両手で包み込んだ。
「お前、いきなり出てきて危ないだろ」
ディルクが壁の後ろに戻るために踵を返すと、死んだはずの熊が大爪を振り上げた。
「攻撃対象が作動。保護を優先、攻撃不可」
ゴキブリの声を聞き振り返ると空を裂く音が耳に届いた。

そして肉塊が宙を舞った。

時に流るる都市（4）

ディルクは思わず閉じた目をおそるおそる開け、周りを見渡した。地面には大爪が、目の前には右腕から先が無くなった熊が立っていた。

「……ひっ！」

ディルクは自分が血にまみれている事に気づき、小さく悲鳴を上げた。次に動かなくなった熊を見上げた。それの左目があった所から空を見ることができることに気が付いた。

本当に死んだか確かめるために近づくと、熊がこちらに倒れてきた。おかげで肉塊に押しつぶされた。

「おいガキ、護られてる分際で前に出るのはどんな了見だ？」

「い、イリヤ！？」

ディルクは僅かに体を動かし熊の上を見ると、イリヤがライフルを肩に乗せ片足を熊に置いていた。

「オレの名前は聞いてない」

体に掛かる重さが増えた。

「イリヤ、ディルクがつぶれちゃうよ」

「ハッ、潰れても誰も困らねえよ」

レアが制止するのも聞かずに、ディルクを何度も踏みつけた。

「だっ、ダメだってば」

レアはイリヤに抱きついて止めさせ、ディルクの腕を引っ張って肉の下から救出した。

「だいじょうぶ？」

「ああ、痛いところはないよ」

ディルクは立ち上がり服に付いた土や葉を落とし、イリヤへと近づいた。そして銃を向け引き金を引いた。

カチッ。

「これに弾が入ってないんだが？」
イリヤは顔色を変えずに答えた。
「会ったばかりの奴に弾を込めた銃を渡すバカがどこにいる？」
「……っ！　お前のせいで死にかけたんだぞ？」
ディルクはイリヤの胸倉を掴んだ。
「こんな深くまで入り込んだお前の責任だ。もし仮に弾が入ってたとしても、コイツは仕留められなかった。俺のせいにするのはお門違いだ」
「納得できるか！　行く前に一言、注意するとかできるだろ」
「は？　……ここに来る途中に明らかに境界だと判る所があっただろ。それにこの時季には境界近くには食べれる木の実は無い。」
ディルクは沈黙した。
「終わりなら手を離せ」
イリヤは腕を掴み、そのまま横にずらし後ろに引いた。
「レア、行くぞ」
頭から地面に突っ伏したディルクを踏みつけ、レアの手を取った。
「ま、待って」
レアはイリヤの手を振り払ってディルクの近くに行った。
「どうした？」
ポケットに手を突っ込みもぞもぞと動かし、何かを掴んで抜いた。
「見てイリヤ、タクトだよ」
レアの手の中には母親のリオン譲りの綺麗な栗毛色のトビネズミがうずくまっていた。タクトはレアの手の中から飛び出し、先ほどまでいたディルクの胸ポケットに潜っていった。
「う～、タクトは私に懐くと思ったのに」
レアが涙目になり、その頭にイリヤが手を乗せる。
「残念だったな」
イリヤはレアから手をどけ、情報表示端末（インパース）を起動した。
「音声入力をして下さい」
「今日この辺りを飛行する貿易船はどこのだ？」

「……サウスバデータの国営船です」
「サウスバデータ……最近傾きかけてる空中都市か。コルスカンドが相手にするとは思えないが」
イリヤはケースの一つから靴を取り出し、黒いブーツから履き替えた。
「レア、こいつを見てろ。何かあったらこいつを使え」
レアは二つの小さな球体を受け取った。
「わかったー」
イリヤはケースを二つ置いて、森の中に消えていった。レアは球をポケットにしまい、ケースに座りディルクをじっと見つめた。
「……何でこっち見てんの？」
「暇。お腹空いた」
「食べ物なんて持ってないぞ」
「ぐぅ～」
レアはお腹に手を当て、口をとがらせた。
「ぐぅ～じゃない。それよりさっき何をもらったんだ？」
「ボールだよ」
「ボール？　何でまたそんな物を……」
「ディルクは知らなくてもいいんだよ」
レアはケースを開け、不透明な袋を取り出した。
「あった」
袋は弧を描きディルクの腕の中に収まった。
「これは？」
ディルクは袋を周りから観察した。
「おやつ。イリヤが作った特製クッキーだよ」
「クッキー？　イリヤが？」
「そっ。おいしーんだよ」
ディルクは袋の口を開け、中から一枚取り出し一口かじった。
「……味がしない」
「えっ！　甘くて、酸っぱくてーおいしいよ」

「これ何が入ってんの？」
「リンゴとー、サトウモロコシの粉とー、あと何かの実の汁」
「実の汁って。もう少し良い言い方があるだろ、果汁とか」
「文句あるなら食べなきゃ良い」
レアは頬を膨らましてディルクに近付き、袋を引ったくった。
「ちょっ、食べる、食べるから！」
レアは袋を持って森の奥へと走っていった。
「待てって、どこ行くんだよ？」
後をディルクが追いかけて行った。

▽

暗く燃える炎の中で狂気を蔓延(はびこ)らせる奴らは数を増し、遂に飛行艇は地に墜ちた。刹那、轟音と共に地上は怖れの色で染め上げられた。それを皮切りに略奪が始まった。
墜落した大型商船に数隻の小型船が群がり、少しずつ物品を運び出し母船へと戻る。一隻が戻ればすぐにまた一隻が近づき略奪をする。その様はまるで人を襲うスズメバチ。
イリヤは物陰からその様子を窺っていた。
……近付き難い。少し様子を見るか。
息を潜め時が過ぎるのを待つも、一向に止める気配が無い。
……仕方無いか。
イリヤはケースを開き、スナイパーライフルを組み立て、徹甲弾を装填した。そして情報表示端末(インパース)をゴーグルとリンクさせた。ゴーグルに風速や湿度などの様々な情報が映し出される。
イリヤは地面に伏せ、銃のグリップを握り、トリガーに人差し指をかけた。そして照準を覗き、飛行船の一つに狙いを定め、引き金を引いた。

一瞬のうちに船体に穴がいくつも空き、船は飛行能力を失った。それは近くにいた二機も巻き込み墜落し、商船を襲う船は無くなった。

イリヤはラッキー、と小さくつぶやき、ケースにライフルをしまった。腰に装着するホルスターをジャケットの上から装着し、四十五口径のピストルを差した。

更に、イリヤはケースから二挺の拳銃を取りだした。一方は弾倉の底に小さな刃のギミックがついており、もう一方は長いグリップになっていて装填数が増えている。

二丁を確かめるように握り、イリヤは商船へと走り出した。

空賊達が突然の襲来に戸惑う中、リーダー格の男が声を張り上げた。

「お前ら少し黙ってろ。武器を持って待機！」

その一言で空賊達がパニックから立ち直った。

「素晴らしい統率力。だが、気付くのが遅かったな」

イリヤはリーダー格の男の頭を後ろから撃ち抜いた。周りにいた全ての眼がイリヤに向けられる。

「何者だ？」

異口同音に告げられる。その中で一部の者達が森の方へと消えていった。

「ハイエナは食べ残しを漁るだけじゃない、自ら奪いに行くときもある。効率の悪い略奪を待つのには飽きた」

そう言ってイリヤは近くにいた空賊を無力化した。訳の解らないことを言う者に戸惑いながらも空賊達は流石というべきか、多くの者が戦意を喪失する事なく立ち向かってきた。

船の残骸が周りに転がっている遮蔽物の多いフィールドで、イリヤは商船から一番離れた位置で戦っていた。

今周りには三人がおり、火力の強い銃を相手は携行している。そ

の銃は市街地などの近接戦闘で、無類の強さを発揮する。
イリヤは遮蔽物を盾にし、銃撃をしのいでいた。無理に突っ込まずにリロードを待てばいい。敵が弾切れを起こし、リロードをする僅かな隙に銃を敵に向け放つ。ドサリと倒れたのを耳で確認し、二人目に取り掛かる。先ほどと同じように物陰からリロードを待つ。
しかし、敵に銃口を向けた時に、もう一人に背後を取られた。銃口が向けられる。イリヤは脚に力を入れ跳躍した。普通では考えられない高さへのジャンプ。外れた弾が味方に当たるのを、初めてジャンプ中に見下ろした。
流石はハンスといったところか。イリヤは高所から敵を射抜き、敵の群の真ん中に降り立った。
イリヤに先ほどとは比べものにならない数の銃口が向けられる。一斉に銃弾が思い思いの方向に飛んでいく。イリヤは数センチ単位で体をずらし、無数の弾丸を避けた。全ての軌道を読み、体を隙間にねじ込む。さながらパズルのピースのように。その所作はイリヤの能力の高さを物語っている。
イリヤは体中につけられたたかすり傷を無視して、反撃を開始した。まず、近くにいた賊の急所である顎を的確に肘で打ち抜く。そのままの勢いで回転して、背後にいた敵の肋骨を蹴り砕く。さらには回転中に左右にいた奴らに発砲した。たったの数秒でイリヤの手の届く範囲の敵は居なくなった。しかし、まだ的(てき)は多い。
リーダー格の男を討たれて、士気が下がったかのように見えた賊達はすぐに立て直し、船の残骸の後ろに隠れイリヤを狙う。向けられた銃口からは再び攻撃が開始された。途切れる事のないつぶての嵐。イリヤは瞬間的に銃口の向きを確認し、一発毎に安全なコースを判断し、障害物を飛び越えた。着地の際にカカト落としを喰らわせ、グリップの刃で別の首を切りつける。新たに向けられた手首を握り、鳩尾に膝蹴りを入れる。そして，敵の銃を握り、こちらを向く敵を掃射し、別のターゲットへと移動した。

イリヤが一方的な虐殺をする展開は終わりを告げた。逃げた筈の奴らが戻ってきたのだ。奴らはどこからか手榴弾を持ち出した。熱風は行く手を阻み、爆風は地形を変化させる。思うように動けなくなり、イリヤは進みにくくなった。

それに加え、奴らは人質を連れてきた。意識朦朧の商船の乗組員（クルー）達と見覚えのある少年少女。イリヤは思わず嘆息した。

「こっちには人質がいるんだぞ」

そう叫ぶ声は爆発音に邪魔されイリヤには僅かしか届かなかった。

「たかが人質。他人を人質にして意味があるのか？　少なくとも俺は他人の命を重んじれるほど出来た人間じゃないが」

イリヤは物陰から大声で答えて、走り出す。放物線をかいくぐり、爆風をスルーし、一気に距離を縮める。人質まであと少しというところで邪魔が入った。背後から銃撃されたのだ。それは戦況を確認した母船から援軍として送られた小型飛行船からのものだった。イリヤはそれをギリギリでかわし物陰へと戻った。

くそ、ケースを置いてくるんじゃなかった。奴らがわざわざ危険を冒すタイプには思えなかったんだが。

「レア、渡したヤツを使え」

レアはハッと今まで忘れていたかのような反応をとった。そしてポケットへと手を突っ込む。そのまま少し停止し、後ろのポケットに手を入れる。今度はさっきより短い時間停止した。そして自分の体を見ながら、上から下に手を当てていく。自分の体を一通りまさぐり終わり一言。

「……なくしたかも」

隣で見ていたディルクは自分のポケットから二つの球体を取り出した。

「何でディルクが持ってるの？」

「いきなり走り出したときに落としてたから拾っといた」

「だったらさっさと返してよ」

「自己管理能力がないな」

二人の言い争いに、イリヤの苛立ちは最高点に達した。
「お前らどうでもいいからさっさと投げろ！」
レアがビクリと震え、ディルクの手から二つとも奪い宙に放ち、耳と目を塞いだ。先に落ちた球体は閃光と高音を放出した。不意を突かれた賊達とディルクはふらつき、目を潰された。そして滞空していた船は狂ったように回転し、猛スピードで地面にぶつかった。
「な、何で！？」
「安い機械の塊が電磁パルス（ＥＭＰ）をくらって落ちない訳ないだろ」
もう一つの球体は地面に着いた瞬間から、濃い白い霧を放出した。催涙効果を持つそれは、白い闇としても視界を奪いイリヤの姿を完全に隠す。その闇の中でもイリヤはターゲットを見失わずに攻め入った。

▽

「これで全員か」
白い闇が晴れた所でイリヤは全ての賊を打ちのめした。ディルクは先の球のせいで動くことはままならない。レアは意識朦朧としている商船の乗組員（クルー）を順番に見て行った。その時に一人の乗組員が目を覚ました。
「あ、だいじょうぶですか？」
「……っ！　み、巫女様、どうしてかのような所に？」
イリヤは勿論、言われた当人のレアも驚いていた。

インシエルト

ディルク達はグリフェンスバーグを下山し、ヴァルカースの家に戻ってきた。せっかく食糧を集めに行ったのに、トラブル続きで成果はゼロ。代わりに手に入れたのは、意識朦朧の貿易商だけだった。ディルクは背中で呻いている商船長をリビングのソファーにゆっくりと降ろした。

「ここは？」

船長はうっすらと目を開けてかすれた声で言った。

「大丈夫、ここに居れば安全です。夜が明けてから話を聞かせてもらいますので、ゆっくり休んでください」

船長が目を閉じてから、廊下に出る。

「へぇ、ちゃんと敬語が使えるんだな」

イリヤが自分の部屋の扉にもたれ掛かりながら声を掛けた。

「初対面で蹴られたりしない限りは、な」

一度止めた足を前に出す。

「どこに行く気だ？　まさか自分から牢に入ろうってわけじゃないだろ」

「そこ以外にオレの居場所があるのか？」

イリヤはポケットから銀の鍵を取り出し、ディルクの足下に投げた。

「牢の右の部屋だ。物置になってるが、好きなように使え。壁に穴は開けるなよ」

ディルクに背を向けひらひらと手を振って、イリヤは自分の部屋に入っていった。足下に落ちている鍵を拾い、ディルクは廊下の突き当たりを左に曲がった。

右にある白い扉の端っこの小さな穴に鍵を差し込み、捻る。部屋の中は薄暗く、ひどく埃っぽかった。真ん中に段ボール箱が積み重

ねて置いてあり、壁の棚には用途不明の品々が並んでいた。
　ディルクは寝るスペースを作るために四つん這いになって段ボール箱を横に押した。箱の山は途中にあった壁の出っ張りにぶつかり、ディルクの上に雪崩れ込んだ。ディルクは段ボール箱の側面を殴るも、凹むだけでどきはしない。
「大丈夫か？」
　ディルクは首を上に逸らし、声の主を確認した。声の主のハンスは、車椅子を上手く操り、ディルクの上に乗っている段ボールを退かした。
「歩けないのか？」
　ディルクは立ち上がって、段ボールを揃えながら尋ねた。
「昔ちょっとあってな。それよりお前さんにプレゼントじゃ」
　ハンスは車椅子の後部から黒い長方形のケースを取り出し、段ボールの上に中身を陳列した。
「イリヤからは貰えないじゃろうからな。順番に説明するからよく聞くんじゃぞ。まず、銃を使ったことは？」
「ない」
　ディルクは段ボールに腰掛け、一番右にある拳銃に手を伸ばした。
「勝手に触るな、使い方を知らんじゃろが」
　ディルクが手を膝の上に置いたのを確認してから、ハンスは右の拳銃を手に取る。
「これはＶＦ８２６という拳銃にわしが手を加えた物じゃ。セミオートで三点バーストだ」
「せ、セミオート？　三点バースト？」
「トリガーを引く度に弾が出るのがセミオートじゃ。三点バーストというのは、一度の発射で三発、弾が出るものじゃ」
「コイツはトリガーを引く度に、三発弾が出るって事だな」
「そうじゃ。装填数は二十一発で、有効射程は五十メートル。金属相手じゃ、あまり意味はない」
　ハンスはディルクにホルスターに入れた二丁のＶＦ８２６を渡し

た。
「イリヤは腰と腿に着けておった」
ディルクはホルスターから銃を抜き、右手でグリップを握った。
「これで敵を撃てる。イリヤを見返してやれる」
「しまっておけ。物騒な、今使う必要はないじゃろうに」
ハンスはディルクが銃をしまったのを確認してから次に移った。
「これがメインウェポンとなる突撃銃じゃ。ＷＡＬという銃をベースにしており、セミオートとフルオートを切り替える事が出来る。フルオートというのは、トリガーを引いている間中、弾が出続けるものじゃ」
ディルクは段ボールの上からＷＡＬを持ち上げて、しげしげと眺めた。
「装填数は四十発、無駄使いしてると直ぐに弾切れを起こすから、気を付けるんじゃ」
ハンスは袖からナイフを取り出した。
「で、最後にこのナイフじゃが、柄のスイッチを押すと、刃が飛んでいく。武器の使い方はイリヤの技を盗むか、教えて貰うかするといい。わしはうまく扱えんのでな」
ハンスはナイフをケースに入れて、ディルクに渡した。
「じゃあ、おやすみ」
ハンスは車椅子を操作して部屋から出て行った。ディルクは並べられた武器をケースに押し込み、異色の棚の上に置いた。そして段ボールを並べ台を作り、その上に寝転がった。ディルクは空腹と疲労を紛らわすために目を閉じた。

翌朝、太陽が顔を覗かせる前――もっとも太陽が顔を覗かせても視認出来るのはたまにだけなのだが――ディルクは段ボールの上から落ちて目を覚ました。
周りを見て夜明け前だと理解して、再び微睡（まどろ）もうとしても、腹の虫が邪魔をして上手く休む事が出来ない。仕方無くディルクは起き

上がり、部屋の整理を開始した。段ボールを一つずつ部屋の隅に運び、自由な空間を少しずつ広げていく。部屋の真ん中に何もなくなると、無機的な部屋が出来上がった。

ディルクは部屋の真ん中に寝転がって部屋を見渡した。段ボールの壁に向かって異色の棚。その棚の上の昨日乗せた黒いケースが目にとまった。ディルクはケースを棚から下ろし、ホルスターを一つ腰に着けて部屋の外に出た。廊下を真っ直ぐに進みガレージを通過し、裏手から外に出る。外は肌寒く、ディルクは身震いした。

ディルクは落ちていた錆び付いた空き缶を、適当な高さの瓦礫の上に置いて距離をとった。ホルスターから拳銃を抜き、コルスカンドでみたテレビなどの記憶の見様見真似で構える。

引き金を引くと、予想以上の反動と爆音と同時に、弾が遙か彼方に飛んでいった。

「ダメダメだね」

ディルクの後ろから街の浮浪者らしき男が声を掛けた。男は見た目、童顔で背が低く幼い感じがする。しかし，周りの空気からしてディルクと同い年、下手したらそれ以上の感じだ。それ以外の特徴と言えば、地面につくほどの長さの垂れを持つバンダナを首に巻いている事ぐらいだ。

「銃は玩具じゃないんだよね」

男はディルクから銃を取り上げ、それを少しいじってから、缶の中心を射抜いた。銃のたしなみは明らかにディルクより上だ。

「まともに扱えないなら撃たないほうがいいよ。それと、夜明け前から消音器（サイレンサー）も付けないで、近所迷惑というものも考えたほうがいいよ」

そしてディルクに銃を返した。

「誰だ？」

ディルクは銃をホルスターにしまいながら聞いた。

「ぼく？　そうだな……インシエルトでいいや」

「いいやって、お前。……どうしてここにいるんだ？」

「朝からウルサくされたら誰でも起きるよ。流れ弾がぼくらみたいなのに当たったらどうする気？」
インシエルトと名乗った男はディルクに背を向け歩き始めた。
「ついておいで。そこじゃ練習するには不向きだよ」
ディルクはインシエルトについて行って岩場に到着した。岩には幾つもの円（サークル）が描かれていて、それにはたくさんの弾痕があった。
「ここは？」
「イリヤって人の事知ってる？　その人がここでよく練習してるんだ。
あの円を撃ってみてよ」
ディルクはホルスターから銃を抜き、目の前の円に向けて片手で構えた。トリガーが引かれ、弾が円のかなり右に新しい窪みを作った。
「初めてでももっと円に寄るよ。銃を使うのは止めたほうがいいんじゃない？」
「そういえば、何でこれ一発しか出ないんだ？　さっきより反動も小さい気が……」
「三点バーストの機能をオフにしたって言ってわかる？　的に当たらないなら三点バーストは弾の無駄使い機能にしかならないし、いくら弾が安く作れるからって無尽蔵な訳じゃないよ」
ディルクはそれを聞いて再び的に狙いを定めた。
「撃つのは待ってよ。それじゃ、さっきと同じだし。まず、片手で撃とうとしちゃだめ。それに足も肩幅に開いて、重心も下げる。まずは安定した体制で撃つことだけを考えて」
ディルクは言われた通りに構え、次の指示を待った。
「……何してるの？　撃たないとどこが悪いか解らないよ？」
ディルクは再び円の右側を穿った。
「本当によく狙ってる？　銃に付いてる凹凸は飾りじゃないよ」
ディルクは銃を眺め、前方の凸型と後方の凹型の溝に目を向けた。
飾りじゃなかったんだ。

「いい？　まずは前の出っ張りを円の中心に合わせて。それで、後ろの溝の間に出っ張りが見えるようにして、狙う」
ディルクは言われた通りに射出し、円の外郭に命中させた。
「あとは……トリガーを引くときの手のブレを修正するだけだね。とりあえずは」
インシエルトはディルクから離れた位置の手頃な岩に腰掛けた。
ディルクは円に狙いを定めた。

▽

ディルクが弾を撃ち尽くした頃には、人々が活動を開始する時間になっていた。例にもれずイリヤ達も活動を開始するわけで、イリヤが火器のケースを持ってやって来た。
「何でここにいる？」
イリヤがディルクの姿を見て、驚いていた。
「いや、インシエルトっていう長いバンダナをした奴にここで銃の練習をするといいって言われたから……あれ？」
ディルクは周りを見渡すもインシエルトの姿はどこにもない。
「インシエルト？　そんな奴聞いた事ないぞ？」
その時、イリヤは連絡が入ったようで耳を押さえた。
「ハンスから連絡が入った、船長が目を覚ましたらしい。俺は戻るが、お前はどうする？」
イリヤはディルクの返事を待たずにケースを持ち、来た道を引き返した。ディルクはその後に続いて行った。

家に戻るとハンスとレアが船長の周りにいた。
「昨日は大変お世話になりました。空賊に襲われた所を助けていただいただけでなく、他の乗員の介抱までしていただいたそうで……」

「そうなのかイリヤ？」
ディルクの驚いた顔を無視して、イリヤは話し始めた。
「気にしなくてもいい。オレはこのヴァルカースの自警団のイリヤ・アーベルだ。お前達は？」
イリヤの名前を聞いた船長は、眉をひそめ口を歪めた。
「私はサウスバデータの国選の貿易の任を承った、ステーン・アスペルと申します。私達はコルスカンドからの物資を受け取りに行く途中だったんです」
その表情がなかったかのように船長は話した。
「コイツを巫女様って呼んだのは何故だ？」
イリヤはレアの頭の上に手を乗せた。
「巫女様は巫女様です。私の国では三年前、巫女様が行方不明になったのです。巫女様は失踪なさる前は政（まつりごと）に助言をして下さってました。巫女様のおかげで我々の国が今まで保てていたのです」
「だから近頃は、国が傾いて来たってわけか」
「そうです」
イリヤはレアを連れて部屋から出て行った。ハンスも部屋から出て行き、ディルクと船長だけが部屋に残された。
「君も昨日私を運んでくれてありがとう」
船長が居心地の悪い静けさを破った。ディルクは一瞬反応に遅れるも、小さく肯いた。
「さて、君をどこかで見た気がするんだが、会ったことはあるかね？」
「いや、俺は会ったことはない……と思う」
「自分の事なのに曖昧な答えだね」
「……昔結構でかい事故に遭ったらしくて、その事故から前の記憶がないんです。事故の事も靄がかかったみたいでよく思い出せないし。事故の傷跡はあるので見ますか？」
「いや、遠慮させてもらうよ。それよりも一つ訊きたいことがある」
船長が質問しようとした所で、イリヤとレアが戻って来た。

「訊きたいことって？」
「いや……後にしよう」
イリヤはディルクを一瞥してから、話を再開した。
「さっき、ハンス、うちの技術者が船を直せると言っていた。数日もすれば帰れるようになるだろう」
「何から何まで、すみません」
船長は立ち上がり、深く頭を下げた。
「それと、巫女様の件だがコイツは何も覚えてないと言ってる。残念だが、人違いだ」
「そんなはずは……そうだ！　我々の国に来てみてはいかがでしょう？　きっと思い出すはずです」
イリヤは少し考えてから口を開いた。
「せっかくだが、断らせてもらう」
「エーッ！」
レアが大声で異を唱えた。
「何で？　せっかく、空に連れてってくれるっていうのに。どうしてわたしが空に行きたいって知ってて反対するの？　こんなチャンス二度と無いかもしれないんだよ？」
レアは涙目になって抗議する。
「隣で大声を、うるさい。空中都市は危険だ、最近は反空ゲリラのデュスノミアの活動が活発になってる。いつ、攻撃されるかも解らないんだぞ。それに、お前一人で行かせられるわけないだろ。」
「ディルクがいるもん」
「この役立たずがか？　……フッ」
イリヤに鼻で笑われ、レアは俯き黙ってしまった。
「何で反対するんだ？　イリヤが行けばいいじゃないか？」
ディルクがレアとイリヤの間に入った。
「オレは有名人だから、目立つんだ。空中都市に顔を出した日なんか大騒ぎだ。お分かり？」
「有名って俺はイリヤの事知らなかったぞ？」

「自分の無知を公言して楽しいか？　コルスカンドでも知られてたら、その真下にあるヴァルカースになんかいられるか？　俺が有名なのはここより南方だ」
「でも、子供の憧れを潰して何が楽しいんだ？」
イリヤはしばし黙り込み、口を開いた。
「……好きにしろ」
その言葉を聞いた途端にレアは目を爛々と輝かせ、何を着てこうだの、何を持って行こうだのと呟き始めた。
「では、我々の国に来るということでよろしいですか？」
「ああ」
イリヤはディルクに付いて来るように言って、廊下に出た。向かいにあるイリヤの部屋を通って武器庫へと入る。
そこは他のどの部屋よりも広かった。棚には丁寧に磨かれた銃が鈍く輝き、研ぎ澄まされた刃は、所狭しと箱に詰められている。
イリヤはナイフの詰められた箱を横にずらし、その下の古ぼけた木箱の蓋を開けた。
「これを情報表示端末（インバース）に付けろ」
イリヤは木箱から通信機を取り出した。
「付けたら、音声入力でコード１９８２」
ディルクは言われた通りに腕の情報表示端末に接続した。
「これで緊急時に連絡が取れる。緊急時以外は使うな、鬱陶しいから」
イリヤは更に小さな巾着袋を取り出した。
「これは？」
「昨日使った球が幾つか入ってる。黒い方が催涙効果を持つ煙幕。黄色の方は音と光で三半規管を攻撃する。その中でも角張ってる物は、電磁パルスも放出して、機械を使用不能にするものだ」
ディルクはそれをベルトに結い付けた。
「それと、銃弾」
イリヤはディルクの手のひらに直方体の箱を三つ置いた。

「さっき、使ってただろ」
そう言ってイリヤは、ディルクを部屋から追い出した。ディルクはとりあえず、自分の部屋に戻った。そして手の上の箱を床に置いた。弾を銃に詰めるために、一番上の箱の蓋を開けると、中にはゴーグルが入っていた。
イリヤの物に形はそっくりだが、レンズに色が入っていない。早速それを装着すると、内蔵されたディスプレーが正常に作動し、周囲の状況を細部までハッキリと映し出す。さらに、視線を辿り、その部分をマクロで表示した。
「あいつ結構良い奴じゃん」
ディルクが周りをキョロキョロと見回すと、棚の上に置いてある、緑色の気色悪い目玉がアップになった。とっさにゴーグルを頭に押し上げた。残りの二つの箱の中には、正真正銘、銃弾が入っていた。ディルクはそれをホルスターから取り出したマガジンに込めた。そして、箱の蓋を閉じた。

一週間後。
商船員達が目まぐるしく動き回り、船とイリヤの家とを行き来し、荷物を積んでいく。大体の荷物を積み込んだ所で、船長がディルク達、三人の前に出て来た。
「巫女様、乗船の準備が出来ました。どうぞ、乗って下さい」
船長が船の入口に立ち、入るように促した。レアが走って船の中に入り、それに続いてディルクとイリヤが乗り込んだ。
船が浮かび上がり、サウスバデータへの航路を進み始めた。

入国

夜の帷が降りた頃、長い航行を終えたディルク達は空中都市、サウスバデータに降り立ち、船長の引率で都市の内部へと入った。
まず目に付いたのは、ひたすら真っ直ぐな石畳の大きな通りだ。通りの先には城という呼び名にふさわしい輪郭の建物がうっすらと見えた。その通りに面して、レンガ外観の似たり寄ったりの長方形の建物が、左右対称（シンメトリー）に並んでいた。ディルク達はその通りを見ながら歩いた。
「ここが空中都市かー。すごいきれいだね。ねっ、ディルク？」
レアは今にも小躍りしそうだ。
「あまりはしゃがないで下さい、巫女様」
そして、船長はこちらへ、と大通りから入れる路地を手で示した。路地を奥へと進むと、小さな木目調の扉があり、その扉を船長が開けた。
「今宵はここでお休みください」
レアがまず中に入り、続いてディルクが入った。イリヤが入ろうとすると、船長が手で遮った。
「あなたに話がある、殺戮者、イリヤ・アーベル」
イリヤは眉一つ動かさずに船長の顔を見た。
「やっぱり知ってたか、ステーン・アスペル」
船長は扉を閉めてから右手を高くあげた。すると、イリヤとステーンの背後から武装した集団が現れた。
「どうやら穏やかな話し合いじゃないみたいだな」
イリヤは自分に向いている銃口を睨んだ。
「単刀直入に聞く。お前が巫女様を攫ったのか？」
イリヤは含み笑いをしてから言った。
「まさか、俺はヴァルカースで初めてアイツに会った」

ステーンはふむ、と手を顎に付けてからイリヤを指差した。
「お前を都市間協定に基づき拘束する」
ステーンが武装集団の後へと姿を消すのと同時に、イリヤは高く跳躍した。三階部分のレンガに指を掛けて下を見るも、ステーンの姿はもう無かった。イリヤの手のすぐ上のレンガに弾が埋め込まれた。
「やばっ」
イリヤは壁を蹴り、隣の建物を使った三角跳びで弾幕を避けながら、屋上へと上がった。イリヤは屋上からディルク達のいる建物の屋上へと飛び移った。真っ直ぐ二ブロック、城の方に進むと、イリヤの頬に一筋の赤い線が引かれた。
「動くな。動いたら撃ち殺す」
背後から光が当てられ、イリヤは振り返った。武装した四人組が身を低くし、距離を縮めて来た。その先頭にいる男の持つ銃口からは細い煙が上がっていた。
イリヤは後ずさるが、それはすぐに出来なくなった。足の裏が半分、縁(へり)から出たのだ。
「動くなと言った筈だが？　まあいい、逃げ場はない。大人しく膝を着け。」
イリヤが居るのは五階建ての屋上。ここら一帯は同じ様な造りで、屋根の高さが揃えられている。隣に飛び移ってもすぐに撃たれて仕舞だろう。イリヤが思案を巡らせてる間にも敵は距離を詰めてくる。
「お前が誘拐犯なら、撃ち殺せたのに残念だ」
「饒舌だな？　緊張感の欠片もなく」
イリヤの数歩手前で四人は止まった。
「お前こそ、緊張感が感じられないが」
「余裕があるからに決まってるだろ？」
イリヤは口元をニヤリと歪め、屋上の縁から踏み切った。隣の建物の壁を滑るように降りると、四人組が縁からイリヤに狙いを定める。壁を蹴り、四人組のいる建物の二階の窓に頭から突っ込んだ。

イリヤの姿を見失った男達が悪態を吐きながら、反対側にある階段を使い、下に降り始めた。
イリヤは男達が目を離したのを確認し、割った窓から外へと降りた。
「無茶しすぎたか」
イリヤは服に付いたガラス片を払ってから、自分の顔に出来た切り傷を確かめるように触りながら、大通りへと出た。来た道を引き返し、先ほどの路地へ入った。イリヤは扉を開き中へ入ると、言葉を失った。そこには沢山のガタイの良い男達が、大量の銃を構えていた。
イリヤが振り返ると、後ろも同じ様な男達に包囲されていた。
「くそっ！」
「取り押さえろ」
その中の一人がそう言うと周りの男がイリヤを押し倒し、後ろ手に手錠を嵌めた。

▽

ディルクが中に入ると扉が閉められた。
「あれ、イリヤは？」
「大人の話し合いでもしてんじゃないの？」
レアは首を縦に振ったが、どこか納得してはいなかった。
「お客様ですっ！　久し振りですっ！　ぼったくるですっ！　ばあ、早く来るです」
階段から、物音に反応したディルクと同じぐらいの年齢の長い黒髪の少女と、腰の曲がった老人が杖をつきながら現れた。
「こりゃまた若いお客。……駆け落ちかえ？」
「駆け落ちっ！　許されない愛なのです！　燃え上がる愛なのです

っ！」
少女が老婆の言葉に反応して跳ね、そしてレアの両手を掴み上下に激しく振った。
「駆け落ちとか、そんな関係じゃないですし。それにぼったくるって、仮にそうだとしても、言ったらダメでしょ？」
「駆け落ちって何？」
レアは頭にハテナを浮かべ、ディルクは苦笑いながら否定した。
「ええ、ええ、否定せんでも解る。若いうちは冒険したらええ」
老婆は諭すようにディルクに言った。
「私も冒険したいですっ！」
「人の話はちゃんと聞けよ。」
ディルクが老婆に指摘した。
「で、何泊かえ？　駆け落ちだからやっぱり一泊かえ？」
「何泊って何も考えてないしな、先に決めなきゃダメか？」
「ちゃんと金を払ってくれれば構わんけ。じゃあソフィー、部屋へ連れてっておくれ。外に待ってる人達がいるけ」
「こちらに」
ソフィーと呼ばれた少女が階段を数段登り、ディルク達に手招きをした。レアがソフィーと先に行き、ディルクは扉を一瞥してから階段を登った。四階の突き当たりの部屋に通された。
部屋の中は丸い小さなテーブルと、それを挟んで一人掛けのソファが置いてある。その横にはダブルサイズのベッドが一つ。
「あなた方以外にお客様はいないし、カメラも盗聴器もありません。好きなだけヤっちゃってください。
あっ、でもでも、この建物は古いですし、防音も完璧じゃないので、あまりにも激しすぎると、私にも聞こえちゃいますから、そこの所よろしくです」
ソフィーは顔を赤らめながらそう言った。
「だから違うって。だいたいレアとオレじゃ、せいぜい兄妹だろ」
「まさかの、近親そ……」

「断じて違う」
ディルクがソフィーの口を塞いで言った。
「ねぇディルク、この人なんて言おうとしたの？」
「レアは気にしなくても良い事だ」
「えー、気ーにーなーるー」
レアが不満を露わにして、気になるを連発し始めた。ディルクはソフィーの口を抑えていた手で、レアの口を塞いだ。
「では、私は失礼します。痴話喧嘩もほどほどに」
ソフィーは自由になった口でそう言って部屋から出て行った。
「だから違うって」
ディルクは手を離し、呆れたように言った。
レアは解放されて大きな欠伸をし、そのままベッドに倒れ込んだ。
「おい、寝るならちゃんと布団を掛けろ」
レアはディルクの言葉に穏やかな寝息で答えた。
「まったく、疲れたからしょうがないか」
ディルクは布団を掛けてあげ、レアの寝顔を見て、優しく微笑んだ。それから靴を脱ぎ、ベッドの端に寝転がった。申し訳程度に布団をかぶり、レアに背を向けて。

翌朝。ディルクは何かが叩かれる音を耳にして、朝の世界に入り込んだ。どうやら誰かが部屋の扉を連打しているようだ。
ディルクはベッドから降り、扉を開けた。そして、ディルクの鼻に強烈な打撃が入った。
「あっ……」
ディルクは右手で鼻を押さえ、赤い液体をせき止める。そして、ソフィーを力無き眼（まなこ）で睨んだ。
「朝から鼻を殴られるなんて、初めてだ」
ディルクは不機嫌を露わにして言った。
「ご、ゴメンナサイッ！　わざとじゃなくてですね、その勢いでやってしまったというか、あっ！　勢いでやっただと私が悪いみたい

……そう！　いきなり開ける貴方が悪いんです！」
ディルクは、指を指すソフィーに呆れつつも尋ねた。
「で、何のようだ？」
ソフィーは思い出したように動き、ディルクに顔を近付けた。
「あなた方、一体何者何ですかっ！　下にあなた方に会いたいって言う、国軍の方々が来てます」
「国軍？　何でそんなのが？」
「そんなのこっちが訊きたいですよ。とりあえずどうします？　追っ払いますか？」
「それ、困るの君達だよね？　国軍を追っ払ったら君達も追っ払われるよね？」
「じゃあ、あなた達を追っ払います。駆け落ち頑張って下さい。お・う・じ・様」
「まだそれ、引っ張るのか」
ソフィーはディルクの額を指で押してから、顔を離し部屋の扉を閉めた。ディルクは手と顔を洗面台で洗い、血が止まったのを確認してから、ベッドに戻り、レアの体を揺さぶった。
レアは布団の中でうずくまり、もぞもぞと動き、難色を示した。ディルクは嘆息し、レアから布団を剥ぎ取った。布団を求めて動き出したレアは、手を空中にさまよわせながら、転がった。そして、ベッドの縁からシーツを巻き込んで滑り落ちた。
「いたっ」
レアは左肘を押さえながら立ち上がって、周りをキョロキョロと見回した。
「あれ、ご馳走は？」
「そんな物はない。眼帯が曲がってるぞ」
ディルクはレアに近付いて、眼帯の僅かなズレを直した。
「そんな細かいこと、気にしなくても良いのに」
レアは寝癖だらけの髪を寝かし付けながら言った。
「下に迎えが来てるらしい。さっさと寝癖を直してこい」

レアが洗面所に入ったのを確認してから、上着の中に手を突っ込み、鈍く光る黒を目の前に翳す。そして祈るように銃身を撫でる。そのまま手をグリップまで滑らせた。手のひらでそっと包み、力強く握る。腰に着けたホルスターに銃を差し込んだ、武器の携帯をアピールするように。

出てきたレアをそのまま部屋の外に連れ出し、一階へと降りた。階段を降りると、広い部屋の四分の一を埋め尽くす軍人達が、扉を隠すように立っていた。ソフィーと老婆はそれの向かいに静かに立っていた。

「巫女様、城へと案内させていただきます」

軍人の一人がそう言うと、ソフィーは目を見開いた。

「み、巫女様ーっ！？」

「ここまでの護衛ご苦労だったな。ここから先は我々が引き継ぐ」

軍人はレアの腕を引っ張って、自分達の元に引き寄せた。

「ディルクッ！」

レアがディルクに助けを求めた。ディルクは手を伸ばし、軍人の腕を掴んだ。

「ちょっと、手荒すぎじゃないですか？」

「離せ」

軍人は冷たくあしらった。

「嫌がってるじゃないですか」

「邪魔者には射殺許可が下りてる」

軍人はホルスターから銃を取り出し、ディルクに向けた。撃鉄を上げ引き金に指を掛けた。

「銃をしまえ、フレッド」

「……了解、大尉」

フレッドと呼ばれた軍人は銃をしまった。

「手荒な真似をして悪かったね、私はジョージ・ベニントン大尉。いやー、最近の若いのは血気盛んな奴らが多い」

ジョージと名乗った男は周りとそう変わらない年齢に見えた。

「無礼は謝るよ。よく、ここまで連れて来てくれた。若いのにやるねー」
ジョージはディルクの横に並び、肘で小突いた。ディルクはジョージから距離を取った。
「こいつも連れてけ」
ジョージは先ほどの穏やかな口調とは打って変わった事務的な口調で告げた、 ディルクの銃を指にぶら下げ回しながら。
ディルクは腰に手を当て、銃を盗られたことを確認した。フレッドがディルクに近付いた。ディルクは袖口からナイフを勢いよく取り出した。ナイフは手に収まり、切っ先をフレッドへと向けた。フレッドはナイフを持つ側の手首を掴み、捻った。
ディルクの腕から力が抜け、ナイフが床に落ち、ジョージの足元に滑った。
「もう少し、ましに扱えるようになってからだな」
ジョージがナイフを拾い上げると、軍人達から笑い声があがった。
「連れてけ」
ジョージの一言で、ディルクとレアは包囲され、外へと連行された。

三年前

カビ臭いジメジメとした雰囲気の地下に作られた、収容される人のことが全く考えられてない牢にイリヤは収容されていた。

長らく使われていなかった最下階に位置するそこは、常に扉の前に軍人が立ち、監視の目を光らせている。イリヤは何もない部屋の真ん中に座り込み、靴の底に仕込んであった刃を取り外した。切っ先を金属の床に当て、思いっ切り引っ掻く。嫌な金属音が部屋の中を跳ね回り、扉の向こうの看守の気を引いた。

「静かにしてろ」

イリヤはそれを無視して床を引っ掻き続ける。床には長方形とそれに繋がる螺旋構造、小さな幾つもの正方形が刻まれていった。

「さっきからうるさいぞ！　一体何をしているんだ？」

看守は扉の上部の小さな窓から中を覗いた。イリヤが刃物を持っているのに気づき、慌ただしく扉を開けた。迂闊にも近づいた看守の首に切っ先を突き付け、喉仏から背骨まで紅い線を引く。看守の背後に回ったイリヤは、背中を蹴り飛ばし、部屋から出た。扉がガチャリとロックされるのを聞きながら、細い通路を走り抜けた。

イリヤは螺旋階段を駆け抜け、足を止めた。階段を登りきったフロアには何人もの軍人が二人一組で待機していた。　イリヤは死角となる壁に背を付け、周りを確認する。

一、二、三、四……数えるのも面倒だ。　イリヤは刃を握り直し、脚に力を込めた。軍人が一組、階段のそばを通り抜けた。イリヤは一人の首に刃を突き差し、そのまま水平方向に引き裂く。さらに返す手でもう一人の側頭部を貫いた。

崩れ落ちた二人の腰から拳銃を抜き、落ちている二挺の突撃銃のストラップを肩に掛ける。二挺の銃のグリップを握り、壁に背を付け周りを再認識した。先程とあまり変わっていない隙のない配置。

異変があれば直ぐに対応出来る洗練されたプラン。イリヤが躊躇っていると、向かいの階段から、小柄な軍人が降りてきた。
「皆さん、上で緊急事態が発生したようです。直ぐに向かうようにと指示が」
「状況は？」
「大尉、此処にいらっしゃいましたか。混乱していて情報伝達が上手く行われていないようです」
「分かった、すぐ行く」
大尉が階段を登っていき、それについて待機していた軍人達も去っていった。何があったんだ？
残った小柄な軍人は帽子を深く被り直し、小さく息を吐き、階下への階段に近付いてきた。イリヤは近付いてきた軍人に銃口を突き付けた。
「動くな」
軍人は目だけを動かし、イリヤを見た。
「聞いてた服装と少し違うけど、誤差の範囲内かな。うん、だいたい合ってる」
軍人は何かを納得したように呟いた。
「何を言ってる？」
「あなた、イリヤ・アーベルですよね？　もう少し出て来るのが遅いと聞いてましたけど」
「……何者だ？」
「あ、ボクはエリクといいます。後で話しますので、今は何も聞かずについて来て下さい。早くしないと、戻ってきてしまいます」
エリクは銃口を手でよけ、イリヤに背を向けて階段を降り始めた。階段の中腹でエリクは止まった。壁に手を着いて、何かを探すように手を動かした。
「確か、ここら辺にあるらしいんだけど、確かめておけば良かったかな……あ、これか」
エリクは壁の継ぎ目に指を這わせ、腰に携えていたナイフを突き

立て、その隙間に沿って滑らせた。どこからかピーッという電子音が発せられ、継ぎ目から右に壁がずれて階段が現れた。
「こちらに」
イリヤはエリクの後に続いて階段を上っていった。

▽

華やかな装飾を施された扉をくぐったディルクとレアは、別々に小さな部屋に通された。
「こちらで失礼の無い格好に着替えていただきます。着替えはこっちで預からせてもらいますので」
軍人はディルクに着替えを渡して、部屋を出た。ディルクはたどたどしい手つきで黒い背広とワイシャツに着替えた。部屋の中から外の軍人に声を掛けると扉が開いた。
「ネクタイはどうした？」
「結び方がわからなかった」
群青のネクタイを結んでもらったディルクは、長い廊下を歩き、謁見の間へと入った。真っ赤な絨毯が敷き詰められた天井の高い部屋の中央に、銀食器が並べられた真っ白なクロスの掛けられた長机が置いてある。三つある椅子の一つにディルクは腰を下ろした。
ディルクが席に着いてしばらく経つと、淡いピンクのドレスに身を包んだレアが入ってきた。髪も綺麗に整えられている。
「ディルク、似合ってなーい」
姿に似合わず、ディルクを指差し、レアははしたなく笑った。
「見た目は変わっても、中身は変わらないんだな」
ディルクが失笑した時に、料理が運ばれてきた。色取り取りの料理が美味しそうな匂いを纏っていた。長机一杯に料理を並べ終わった頃合いに、奥の扉からあからさまな、いかにも私が王様です、と

言った雰囲気の、冠をかぶった小太りの中年が、従者を引き連れて歩いてきた。
従者が引いた椅子に腰を下ろした王は、ナイフとフォークを手に取り、自らレアに料理を取り分けた。
「ご馳走だよ、ディルク。ご馳走だ、正夢だ」
「ハハハ、お気に召したようで何よりです、巫女様」
「その巫女様ってのは何なんだ？」
ディルクは従者に取り分けられた食べ物を気に掛けず、暖かくない眼差しを王に向けた。
「朝食を食べてないのだろう？　話し合いはデザートでも食べながら、じゃ、ダメかな？」
隣で口一杯に食べ物を詰め込み、幸せそうな顔をしているレアを、一瞥したディルクは、目の前のフォークを手に取った。
「いただきます」
一口食べると、さすがと言うべきか、地上のものとは比べものにならない美味しさが、口の中に広がった。ディルク達は目の前の食事をあっという間に平らげ、運ばれてきたケーキにフォークを刺した。王がティーカップをソーサーに置いて話し始めた。
「何の話だったかな？」
「レアの事を何故、巫女様と呼ぶのか、だ」
再び威嚇的な態度をとるディルク。
「そう、それだったね。
巫女様は我々の国を救って下さったんだ。
三年前の話だ――」

▽

――三年前。

サウスバデータは空中都市として重要な任を担っていた。サウスバデータの周囲には、小規模な空中都市と大規模な地上都市が密集している。一つは空中都市同士の交易を補佐すること。もう一つは空中都市を守護することだ。小規模な空中都市は、大規模な地上都市とさして差はない。あると言えば、空に浮いているかいないか、ぐらいの差しかない。

地上都市には空中都市の存在を、羨み嫉む者達がたくさんいる。その思想はある種の宗教のように地上中に広まっており、空中都市を潰そうと考えるものも少なくない。その中の集団の一つは空賊である。空賊達は空中都市の一つを攻め落とし、拠点としており、地上の人間は反空のシンボルとしている。

その賊都の主領が地上都市間に降り立ったのがおよそ三年前。主領はなかなか空中都市を攻め落とせない三つの地上都市に、ある提案をした。攻め落とせないのは、サウスバデータの守護があるからではないか？　サウスバデータを協力して落とせば、目的の都市も陥落させる事が出来るのではないか、と。

空中都市と違い、都市間で連絡を取るのが難しい地上都市で、初めて三つの大都市が手を組んだ。そしてサウスバデータに矛先は向けられた。サウスバデータは第一波を、制空権により凌いだ。が、第二波、第三波と賊都から配置された智将の策により、徐々に形勢が悪くなっていった。

そこでサウスバデータは国内から様々な人物を召集した。科学者、軍人、学生、ある程度有用性のある人物を片っ端からかき集めた中に、当時十歳のレアがいた。今みたいに、天真爛漫ではなかったレアは、招喚された時に、私は全ての事を知っています、と淡々と口にした。

「子供の戯れ言だとお思いでしょうが、策がないのだから、騙されたと思ってやってみて下さい」

王はその言葉を受け入れ、それに続く言葉を待った。レアは、迎

撃配置を数センチ単位で指定し、迎撃時間も秒単位で指定した。王はレアに言われた通りに軍を配備した。その結果、智将の策を完全に打ち崩し、地上の戦意を殺ぐ事に成功した。
それでも僅かに残っていた火種を、レアの策を用いた智将の死を以て鎮火した。王はその結果をたいそう喜び、レアに褒美をとらせた。

▽

「……と、いうわけで、巫女様なのです。理解されましたか？」
「巫女様の所以は分かった。
だけど、イリヤの言ったとおり、レアは巫女様じゃないと思う」
「何故ですか？」
王は体面上だけ疑問を装ったように見えた。目が確信の光で満ちているからだ。
「話しに聞いたレアは、今のレアとあまりにも違いすぎる。年を経て大人らしくなるならまだしも、言い方は悪いが、何故退行している？」
「そんな事ですか？　もし仮にその無邪気さが演技だとしたら？」
ディルクは少し考え込み口を開いた。
「レアはそんなに器用じゃない」
「そうですか。では真偽を確かめてみよう」
王は従者の一人に何かを囁き、従者はレアに近づいた。
「どうなるんでしょうね？」
どこか嬉しそうな王はディルクに問う。意味の理解できないディルクは従者の所作に目を移した。従者はレアの椅子を引き、レアの正面に立った。そしてレアの眼帯を外した。
レアは琥珀色（アンバー）の左目を静かに開いた。数秒の後、静寂がレアの悲

鳴によって破られた。ディルクは立ち上がり、レアの元に行こうとした。
「動くな」
ディルクの後ろに控えていた従者が、ディルクに銃を向けていた。
「大丈夫です。別に何かした訳じゃありません」
椅子にぐったりともたれ掛かるレアを一瞥した王は、ディルクにそう言った。
「レアはどうした？」
ディルクは、先ほどよりも明確な敵意を王へと向ける。
「巫女様は巫女様となられたのですよ。巫女様を部屋へ」
不可解な言葉を告げた王は、レアを運ぶ従者に続き、部屋の外に向かった。
「そいつは、元のところに戻してやれ」
従者は王の命を聞き、ディルクの首に後ろから銃を押し付け、歩くことを促した。部屋の外に出たディルクは、持ち物を返却され、軍人達に引き渡された。持ち物の中にはディルクの銃とナイフも含まれていた。
軍人の一人が背を向け、歩き始めた。それに続いて周囲を囲まれたディルクも歩き始めた。
ディルクは、数歩進み、急に城の方へと走り出した。服の隙間からナイフと銃を取り出し、服は前方に投げ捨てる。急に視界を遮られた真後ろの軍人の首に腕を回し、ナイフを突きつける。首に回した手に持つ銃を、残りの軍人へと向ける。
そしてディルクは牽制しながら後ずさる。嘆息した一人の見覚えのある軍人は堂々と正面から近づいてきた。ディルクは少し躊躇ってから、引き金を引いた。が、銃からは引き金を引いた音しか発せられなかった。
「悪いけど、弾は抜かせてもらった」
ディルクは銃をベルトにさしてナイフを軍人に向けた。そして鍔の位置にあるスイッチを押し込む。

弾性力の位置エネルギーが運動エネルギーに変換され、軍人へと襲い掛かる。軍人はその刃を腰から抜いた特殊警棒で叩き落とす。

「こんなの機械に頼るまでもない。君はナイフはもう少し扱えるようになってから、という私の言葉を聞いてなかったのか？　連れてけ」

されるがままにされていた軍人が、ディルクと立場を入れ替え、手に輪を掛ける。両手を拘束されたディルクは、大人しくついて行った。

神格連鎖機構

城の最上部に位置する小部屋の扉を王が開いた。中では、左目を眼帯で隠したレアが、小窓から外を眺めていた。
「ご機嫌はいかがですか、巫女様？」
「私をディルク達の所に帰して」
「無理ですよ。巫女様にはこれから以前のように働いてもらいます。私にもっと良い生活をさせてください」
王が口を醜く歪ませて、下卑た笑い声を出した。強欲の塊め。レアは小さく呟いて、窓から暗い空を見上げた。王の声が止むのと同時に、白衣を纏った従者がレアの腕を掴んだ。
「いたいっ！」
レアがバランスを崩し、椅子から転げ落ちる。それでも従者は執拗にレアの腕を引っ張った。
「大人しく従いなさい。彼は解剖するのが好きなんだ。君のその左目、抉り取られるかもしれないぞ？」
必要以上に恐怖を与える言葉を放った王は、大人しくなったレアを見て、一人満足げな顔をした。従者に手を引かれ、レアはいくつもの扉を横目に見ながら、真っ白な部屋に連れて行かれた。
部屋の中央に設置されている拘束具の付いた椅子に座らされ、手足を固定された。レアの眼帯が乱暴に外される。左目を閉じたままレアは、白衣を睨み付けた。
「早く始めろ」
王が上方に配置されているモニタールームから、マイク越しに語りかける。
「嫌ですよ、両目が開いてないと私はやりません。中途半端になったら面倒じゃないですか」
「じゃあ無理矢理にでも開かせろ」

「汚れるから嫌なんですよね」
そう言いながらも口元が緩むのを精一杯こらえていた。白衣の内側から煌めくメスを取り出し、レアの大腿部に鉛直に突き刺す。レアが痛みで両目を大きく見開き、大きな悲鳴を上げる。その悲鳴に、痛み以外が原因の声も混じる。
「じゃ、ちょっとそのままにしててね」
従者が頬に付いた血液を手の甲で拭い、嗜虐的な笑みを浮かべ、レアを一人残し、部屋の外へと移動する。そして、眩すぎる白い光で部屋が満たされ、悲鳴が途絶える。
「いつまで、この不快な体勢のままにしておくつもりだ？」
光が収まってからのレアの第一声だ。先程までの天真爛漫なものではなく、声を聞いた者が自分の全てを見透かされたと感じる、冷たく染み渡る声。部屋の扉を開き、王は従者より先にレアの元へ行き、頭を下げた。
「さっさと外せ、ただでさえ手荒に事を進められ、腹が立っているんだ」
レアは王の服の袖を引きちぎり、自分の太ももをきつく締め上げた。王は自らレアの体を持ち上げ、部屋を後にした。

▽

城の裏手から逃げだしたイリヤは、エリクの先導で裏路地を歩いていた。
「お前は何者だ？」
イリヤが足を止めた。
「エリク・ハンゼン。レアの兄です」

エリクが振り返り、イリヤの顔を見上げる。
「お前ぐらいの年なら、俺の事を知ってるだろう。なんで助けた？」
エリクの顔に、窓から漏れた光が差し込み影を落とす。
「勿論あなたが何者かって事ぐらい知ってますよ」
エリクの声が少しずつ震え始める。
「僕の父を殺したのがあなたですから。それでも僕は、あなたに頼らざるを得ない……」
エリクの握られた右手から紅い液体が滴り始め、声に怒気が含まれる。
「レアを救うためにはあなたの力が必要なんですっ！　そう言ったんです……」
そう言って、エリクが振り返り歩き出す。
「言ったって、誰が？」
質問を無視して歩みを早めるエリクに、イリヤは仕方無く付いて行く。エリクが突然立ち止まり、左側の扉を勢いよく開けて中へと姿を消す。部屋から聞き覚えのある声が漏れ、イリヤはゴーグルをあげ部屋の中を覗いた。ディルクが居た。澱んだ雰囲気を身に纏い、ソファーに沈んでいた。
「……あ、イリヤ」
ディルクが間の抜けた声で言った。
「どうした？」
「あー、何というか……レアが拉致された」
「は？」
「今日の朝、軍人達が来て、城に連れて行かれて、レアだけそのまま」
ディルクはばつの悪そうな顔をして、イリヤから目をそらした。
「なんで、すぐ連絡しなかった……あー、俺の方で取られてたか」
イリヤは自分の右腕に情報表示端末（インパース）ないのを思い出し、頭を掻いた。
「座ってください」

エリクがイリヤに座るように促し、イリヤはディルクの隣のソファーに腰を下ろした。奥からソフィーが出てきて三人の前に、お茶の入ったカップを置く。
「疲れを取るハーブが入ってます。見たところお疲れのようなので」
ソフィーがエリクと一瞬目を合わせ、緊張した面持ちになり、奥へと姿を消した。
「とりあえず、話と違うことが幾つか起きてるので、確認を。あなた方、特にその元気のない方は、レアを助ける気があるんですか？」
ディルクは顔を少し上げ、エリクの顔を見た。
「……誰？」
「レアの兄だそうだ、本当かどうかは知らないが」
イリヤがディルクに囁いた。ディルクが言葉を紡ぐ前に、イリヤが訊いた。
「俺たちはレアを連れ戻す。だがエリク、お前に協力するかは決めかねる」
「どうしてです？　あなたと僕の利は一致してるじゃないですか」
「俺にはお前の真意が分からないからな」
エリクは逡巡し、適切な一言一句を選びながら、言葉を慎重に紡ぎ始めた。
「神格連鎖機構（しんかくれんさきこう）は知ってますか？」
「二百年前の科学革命のきっかけとなった……」
「違います、それは淘汰性連鎖機構（とうたせいれんさきこう）です」
ディルクが、頭に疑問符を浮かべ首を傾げたのを見て、エリクが立ち上がった。ディルクの後ろにある棚から、一冊の分厚い古書を手に取り、椅子に座った。ページをパラパラと捲り、目的のページを開き、ディルクの目の前に置いた。
「まず、神格連鎖機構の元となった神と崇められている存在について話さないと。ここを読んでください」
エリクが指さした文に目を落とす。

ここでは、アレを表す固有名詞が存在しないことから、便宜上、神とする。
神は人智を越えた存在だ。今までに一体しか確認されていない種族であり、不死である。
その姿を変えることができ、発見時は人間に酷似し背中から翼を生やしていた。その琥珀色の双眸で全てを見通し、背より生える両翼で世界に翳りを創る。さらに、瞬く間に世界を駈け、両の腕で均衡を保つと言われている。

「それでですが、ここからは事実かどうか分かりませんが」
エリクが続きを説明し始めた。
「B・S・ニュートン（ブランドシギスムンド）という人が神の住処を突き止めました。そして、神が寝ている間に解剖したんです。腕を脚を、目に脳、心臓までも切り出しました」
「いきなり解剖っておかしくないか？　普通捕獲が先じゃ……」
「当時、最も大きかった捕獲者の集団を一瞬で蹴散らし、人間のように嘲り笑ったらしいです」
ディルクが息をのんだ。
「切り出したパーツはヴァルカースに運ばれました。しかし神も生物ですから、いくら体を研究した所で、数値上では大した結果が得られなかったのです。そこで彼、ニュートンは神の一部を人間に移植しました。そして、神がどのような感覚を有しているかを調べさせました。
適合しなかった人間がたくさん亡くなり、また選ばれた人は劣悪な環境の施設に収容され、自らの状況を逐一報告させられたそうです。
移植から数年後、適合者達に異変が見られました。取り憑かれたように自らを傷つけ、内側が崩壊しました。そして、ひとり、またひとりと自ら命を絶っていきました」
「……作り話じゃないんだよな？」

ディルクが掠れ気味の声で尋ねた。
「ええ、二百年前の事として、伝承されている話です。調べれば幾つかの研究資料や、語り物が見つかるはずです」
エリクが無知な子供に教えるように言った。
「その後、ニュートンが自らの体に左目を埋め込み、そこから、神格連鎖機構の歴史が始まりました」
イライラが募ったのか、沈黙していたイリヤが口を出した。
「もう止めろ。うだうだと長い説明するな」
「え、でもまだ全然説明できてません」
「昔話を交えてるから長くなるんだ。その神の体の一部が神格連鎖機構そのものだ、っていえばいいんだよ。そんな昔話とかの情報はデータベースを漁ればすぐ出てくるんだ」
「あ、じゃあ淘汰性連鎖機構は？」
「神格連鎖機構の数値と、簡単な構造だけを熟考して造られた一点特化型の機械だ。学校で習わなかったのか？」
「全然教えてもらわなかった」
「どこの出身ですか？」
エリクが尋ねる。
「コルスカンドだけど」
「おそらく、意図的に隠されてたんでしょうね。あんな秘め事だらけの国によく住んでられましたね」
エリクが苦笑混じりで言った。
「で、神格連鎖機構がどう関係あるんだ？」
「レアはその左目を宿しているんです。だから、王に必要とされるんです」
イリヤが閉眼し、口に手を当て何かを考え込み始めた。
「意味が分かんないんだけど」
ディルクがイリヤを横目に見ながら言った。
「神格連鎖機構の左目は……」
エリクが本を閉じて、お茶を啜った。

「そうゆう事か……」
一人納得した顔のイリヤが、立ち上がった。
「どうしました？」
言葉を中断して、エリクが見上げた。
「ディルク、レアの鞄は？」
「部屋にある。四階の突き当たり」
イリヤが階段を上り、姿を消した。
「何しに行ったんでしょうか？」
「さあ？」
ディルクが首を傾げた。その数分後、イリヤは麻袋を一つ携えて降りて来た。
「行ってくる」
そう言い放ち、ゴーグルを下げ外へと出て行った。
「待ってください。僕も行きます」
エリクが重い体を起き上がらせ、イリヤの後に付いていく。取り残されたディルクがハーブティーを飲み干し、駈け出した。イリヤが歩きながら、麻袋からネズミを二匹取りだした。二匹は手の平の上で、息のあった伸びを見せ、両翼を広げた。
イリヤは、それぞれの前脚にビー玉ぐらいの大きさの玉を括り付け、二匹を空へと放った。二匹は空で円を描いた後、それぞれの役目を果たしに別れていった。
イリヤは追いついた二人に、目もくれずに歩みを早めて先を見た。ディルクはイリヤの横に並び、早口で尋ねた。
「どこに行くんだよ？」
「離れろ」
イリヤはその一言と共に、ディルクを扉へと飛ばした。何かが炸裂する音の後に、ディルクは硬い壁面に肩をぶつけた。直後、エリクが中に飛ばされてきて扉が閉められた。
「何で扉が閉まるんだ？」
「黙って」

状況が理解できないまま、体を低く押さえつけられたディルクはエリクの顔がやけに緊張しているのに気が付いた。
「……何があった？」
「外に軍の少数精鋭部隊が待機してました。イリヤがあなたを押さなければ、あなたの体は蜂の巣にされてましたよ」
「そんな、全然気付かなかった」
「僕も気付きませんでした。突然上から霰弾を発射してきたんですよ。僕もイリヤに蹴飛ばされなきゃ、直撃してました。あの人は場数を踏んでるから気付いたんですかね？」
「……イリヤは？」
体を前に傾けたディルクをエリクが押さえた。
「今出て行ったら、それこそ餌食ですよ」
「でも、撃たれたなら助けないと」
「あなたは足手まといでしょ？　それにあんな奴は助けなくても良いんですよ……」
語尾をボソボソと言ったエリクは、ディルクの手を引き壁際へと連れてった。
「ここら一帯の建物は非常事態に備えて、地下通路へと繋がってるんです。一旦退きましょう」
エリクが床を持ち上げ、階段を示す。ディルクが中へと入っていき、エリクが続いて、床を下げ、入り口をロックした。

夜襲

イリヤのゴーグルのディスプレイにある文字が浮かび上がった。
「第二守護群（セカンド・クラスター）の有効範囲に危険度Ａ以上の物体を多数確認」
イリヤは唇を噛み締め、第二守護群の発動をした。イリヤは隣にいたディルクを近くの家へと投げ飛ばし、次いでエリクを同じ家に蹴り飛ばし、扉を閉めた。
直後、空から無数の金属の雨が降り注いだ。細い道に反響し、金属が跳ね回る音が拡大する。イリヤを囲むように、銀色の塊が墜ちた。そして、その中の歪（いびつ）に変形した物を除いた、無数の薄っぺらい銀色の菱形が、イリヤを守るように浮遊した。
建物の上から、数人の軍人が降りてきて、イリヤを囲む。
「何の用だ？」
いくつもの菱形によって構築された盾（というよりは塀に近い）を挟んで、イリヤが問うた。軍人は返事の代わりに、発砲音を奏でた。銃弾が盾に当たり、拉（ひしゃ）げて落ちる。石畳に当たり、小気味いい音が発現する。それを皮切りに、イリヤの周りの菱形が炸裂した。
守るという役目を放棄し、刃として軍人達に襲いかかる。鋼が空を裂き、壁面に突き刺さり、削り、破片と共に降り注ぐ。とっさに屋内へと身を隠す細身の女。飛び交う刃を警棒で打ち砕く大男。落ちる破片やひたすらに避ける若い軍人。そして、イリヤの目だけを見て、身じろぎ一つしない者。
「あんたら、おかしいんじゃないの？」
イリヤが再構築された壁の向こうで呟いた。その直後、建物から障壁を飛び越え手榴弾が、イリヤの足下に転がってきた。菱が手榴弾を覆う厚いドームとなり、イリヤの姿を再び晒した。
「やっと、姿を見せてくれたか」
足下の爆発音と同時に、イリヤに散弾が浴びせられた。イリヤが

突発的に体をずらし、避けきれなかった弾がイリヤを貫き、紅い桜を咲かせた。
「……チッ。何でこの距離で撃って急所に入らないかなぁ？　噂通りの化け物かよ……」
散弾を放った若そうな軍人が引き攣った笑いを浮かべた。
「俺ごときを化け物呼ばわりか。本物の化け物レベルの奴らに失礼にも程がある。
あー、でもまだ、死にそうじゃないな」
語尾を言い切るか否やの所で、イリヤは若い軍人に向かって走り出した。再装填された弾が射出された。しかし、第二波は菱形もとい第二守護群が全弾を相殺し、余るパーツで構成された剣で、イリヤは若い軍人を斬りつけた。
とっさに身を翻したものの、軍人は浅く切り込まれ、退がらざるを得なかった。イリヤも距離を取り、周りに菱形の盾を浮かべ、次の攻撃に備える。イリヤの攻撃に全く動じなかった軍人が、腰から短刀を抜き逆手に握った。
「大尉！」
大尉と呼ばれた男が一歩前に出た。
「やっぱり、武器は相手と同じタイプの物を使わないと」
そう言って上体を前に倒し、数歩でイリヤの眼前に迫る。そして、体と共に刃をおこす。イリヤは切り上げられた短刀を、浮遊する菱形の盾で防ぎ、剣を振り下ろす。大尉が、自身に引き寄せた刃の上で斬撃を滑らせ、地面に逃す。そのまま、イリヤの盾に脚を着き、斜めに傾いた事を利用し、高みに移る。
イリヤが視線を上に移し、地面から振り上げた切っ先の刃を放つのと同時に、横から急所を狙った単発が撃ち込まれた。少し短くなった剣で頭部への弾を防ぎ、刃として地面と平行に浮遊していたものを、いくつか盾へとシフトさせる。直後、上から短刀が繰り出され、イリヤは後ろに大きく跳ねた。
着地と同時に、盾と刃を四方に展開し、大尉を除く三人の動きを

制限する。警棒を構えた大男が、幾つかの刃を叩き落とし、仲間に余裕を与える。若い軍人は、女兵と共に建物へと隠れ、大男も身をひいた。
イリヤはさらに一歩踏み出し、剣を突き出した。大尉はそれを右にかわし、短刀を振り抜く。剣の一部が、浮遊する刃へとコンバートされ、大尉の腹部に紅い線を引いた。イリヤは頬に付けられた傷を拭い、刃を飛ばした。大尉がそれを踏み、自陣に舞い戻りイリヤの足下に煙玉を放った。白煙が通りを満たしたのと同時に、爆炎と爆風が生じた。
建物の壁を吹き飛ばし、地面を抉る。煙が灰色に染まり、霧散した。クレーターの中心で、くすんだ銀の半球の塊が崩れ、その中に満身創痍で立ち続けるイリヤに降りかかった。
肩に掛かった灰色の破片を払い、右手に握る剣を、地面に突き刺した。
「……とんだ置き土産だな」
イリヤは菱形へと回帰する剣を見ながら腰を下ろした。溢れ流れる血を見ながら、イリヤは深く息を吐いた。そしてゆっくりと寝転がり、体から力を抜いた。

▽

上から何かが爆発したような音がして、天井から何かよく分からない破片がパラパラと落ち、ディルクの頭に降りかかった。ディルクは頭を払いながら、歩みを早めた。
「どこに行くんだ？」
「こちらの居場所はどうせわれているので、このままレアの所に行きます。運が良ければ、誰にも見つからないで、距離を稼げます」
エリクがポケットに手を入れ、一枚の紙切れを取り出した。それ

を確認して、首から提げていた自らの情報表示端末（インパース）を起動させる。
その中から目的の情報を取り出し、壁に投写した。
「これはこの通路の地図です。避難経路図に裏道を加えた特別製です。今僕達がいる所から城の正門までは、交差路で曲がることなく行くことが出来ますが、あえて迂回して、城の裏手から出たいと思います」
エリクはルートを一通り、指でなぞりディルクに教えた。端末を待機モードに移行して、歩き始めた。

目的の場所の階段を上り、ディルクは外に出た。風が奔り、雑草が風に乗りひらひらと舞った、不自然な千切れ方をして。
「危ないっ」
エリクがディルクの服を引き、中へと引き戻す。その直後、出口の扉に金属が当たった音がした。
「……狙撃された？」
ディルクが困惑した表情でエリクに尋ねた。エリクが無言で再度扉に手をかけると、外側に思い切り跳ね上げられた。
扉の外側に銃を構えた軍人三人が待ち構えていた。その真ん中で見覚えのある軍人、フレッドが照準をエリクに定めた。引き金に触れているフレッドの指が僅かに震える。銃に飛んできた何かが衝突し、銃口がぶれた。そして周りに白煙が流れてきた。
ディルクの胸にトビネズミが飛び込んできた。ディルクはとっさに頭に付けてたゴーグルをエリクに付ける。
「この煙にはたぶん、催涙効果がある。これ付けて逃げて」
エリクはディルクが腕を掴んだのを確認して、走り出した。
「俺が追うから、お前らは外に行って夜警に警備の強化を通達。巫女の保護を最優先しろ」
フレッドが周りのメンバーに指示を出し、一人煙から抜け出し、ディルク達を追い始めた。
「誰か付いてきます」

エリクが目を押さえているディルクの耳元に囁いた。
「何人？」
「一人、多分さっきの銃を向けてきた軍人かと」
「撒けそう？」
ディルクが心配そうに聞いた
「きついですね。あっちは本物の軍人ですし、少し火器が扱える程度の一般市民に何が出来るんですか？　と言うわけで、一人で逃げてください」
エリクはディルクを近くの出口から、イリヤのように投げ飛ばしてそのまま走り続けた。エリクはゴーグルを返し忘れた事に気が付き、振り向くが後ろからフレッドが来ていたので仕方なく付けたまま距離を取る。
フレッドがエリクを視界に捉え、足を速める。地面を蹴り低く跳躍し、エリクの背中へ、上から膝を入れる。倒れたエリクに膝を押し付けたまま、エリクの左手を後ろに回し、もう片方の膝で押さえつける。腰から拳銃を抜き、安全装置を外して頭へと押し付ける。
「もう一人はどこへやった？」
「入り組んでるから迷子にでもなったんじゃないですか？」
エリクは首を捻り、精一杯強がった。
「状況が分かってないようだな」
エリクの頭をグリップで殴りつける。エリクが痛みで呻いた。
「もう一度だけ聞く。もう一人はどこだ？」
「迷子だって言ったじゃないですか」
「そうか」
フレッドが自分の四角い通信端末に口を近づける。
「一匹、取り逃がした。上で捕まえろ」
そう言って、端末をしまい、銃口をエリクに向ける。エリクが目をそらし、体を強張らせた。その瞬間、フレッドの体が横に飛び、壁に頭をぶつけた。
「まったく、道が分からないから戻ってみたら大変なことになって

るし……」
　ディルクが蹴り飛ばしたフレッドを見やりながら、エリクを起こした。
「何で戻ってきたんですか！」
　助けてもらったにも関わらず、エリクはディルクを怒鳴りつける。
「……いや、道が分かんなかったし。あとゴーグルも返してもらってなかったし」
「だからって、死ぬかもしれなかったんですよ！」
　フレッドが小さく呻き、頭を押さえながら立ち上がった。
「くそっ、油断した」
「逃げますよ」
　エリクがディルクの腕を引っ張り、角を曲がった。それを追い、ふらつく足取りでフレッドも角を曲がった。エリクが振り返り、腰から銃を抜き放つ。フレッドが壁へと体を預け弾をかわし、しっかりとした足取りで走り始めた。
「ディルクも撃って下さい。銃は持ってるでしょ？」
「あ、ああ……」
　ディルクも走りながら銃を抜く。エリクが再度角を曲がり、ディルクも付いて曲がる。エリクが立ち止まり、角で発砲する。フレッドが途中の曲がり角に身を潜め、銃撃戦が始まった。
　エリクが銃だけを出し、乱射する。それに対し、フレッドは一発一発をきちんと狙って撃ってくる。ディルクは低く身を構え、角から顔を出して狙いを定める。ディルクが引き金に手をかけるのと同時に、エリクがディルクの襟を引っ張った。銃弾がディルクの顔のあった位置を通過した。
「命知らずと言うより、ただのバカですね」
　エリクが応戦しながら呟いた。
「ごめんなさい」
　ディルクが再度銃を構え、エリクとフレッドの銃撃に参戦する。エリクと同じ相手を確認せずに撃つ、弾の無駄遣い。

しばらく、そんなような応酬が続いたが、それもエリクの銃の弾切れで終わった。フレッドはエリクの銃の弾切れに気付くと、撃つのを止め、ディルク達に迫ってきた。再び逃走劇が展開される。
「撃ってくださいっ！」
エリクがディルクに撃つよう促す。多少距離が開いたため、後ろを振り返り立ち止まって、教えてもらった通りに狙いを定める。サイトにフレッドが入る。ディルクの手が恐怖で震える。
「早く撃ってくださいっ！」
「で、でも……」
躊躇うディルクの手に、エリクは自分の手を重ね、引き金を引いた。弾はフレッドから逸れ、ちょうど真横にあった配電盤に当たった。配電盤から小さく火花が散り、大きく燃え上がった。
「ぐぅあぁぁぁあっ！」
フレッドが炎を顔にまともに受け、両手で顔を覆い足を止めた。その隙にディルク達は、地下通路から出て、王城の中に忍び込んだ。

夜襲（2）

暗闇の中を靴の音だけが移動していく。埃っぽい人気のない部屋の前に着くと、中へと入っていった。エリクがディルクの目を見据えた。

「何で撃つのを躊躇ったんですか？」

エリクの顔が心なしか険しい。

「結果的に逃げれたからよかったものの、殺されるところだったんですよ」

ディルクが俯いたまま口を開いた。

「人を撃ったことなんか無いし……」

エリクがディルクに歩み寄り、無言でディルクの頬を打つ。

「……そんなことですか」

ディルクがエリクの顔を睨む。

「そんな事って、何だよ。人の命を奪うんだぞ！」

「そうですね。僕だってそんなことは分かってますよ」

「それなら何でそんなこと言えんだよっ！」

「僕はこの事のためだけに時間をかなり費やしました。助言や計画があったからと言って、それもいつ狂うか分からない。そんな不安定な足場で必死に計画が成功するように命がけなんです。

ただの料理屋の下働きが国に楯突くんです。軍から装備を盗んだり、必要なお金を騙し取ったり、必死なんです！　僕が下に落とされたらそこで全部終わりだったんです。　僕が……僕がどんな思いでここにいるかなんて、あんたには、あんたには絶対に分からないじゃないかっ！」

エリクはディルクの腰から銃を奪うと廊下を駆け出した。

「おい、待てっ！」

ディルクが慌てて廊下に出るも、エリクの姿は確認できなかった。

「これからどうすりゃいいんだよ」
ディルクは当てもなく廊下を歩き始めた。手元に得物がないと暗闇が急に襲いかかってくる幻想に取り憑かれそうになる。廊下の壁に手を付いて少しずつ歩みを進めると、先に一筋の光が扉の隙間から漏れているのが目に付いた。扉に近づくとギィと音を立てて隙間が広がった。中を覗くと見慣れた銀髪が明かりの元に揺れている。ディルクは思わず扉を大きく開けて中に入った。
「予定より二分と三十六秒早いな。不確定事項だから仕方ないか」
冷たい声を放つ、明らかに雰囲気の変わったレアを視界に捉え、ディルクは一歩後ずさった。居心地が悪い。感じる空気が体を歪(ひず)ませる。
「逃げなくてもいいじゃないか。私はレアだぞ。もっともあんな不格好な振る舞いはしないがな」
レアは笑いながら立ち上がった。それと同時にディルクの後ろの扉が音を立てて閉まった。扉の影にいた大臣のステーン・アスペルが扉の前に立ち、腰の短剣に手を掛けた。
「遠慮するな、近くに寄れ。寝食を共にした仲だろう？」
ディルクは後ろを警戒しながら一歩一歩慎重に足を出した。自分のズボンの内側に冷たい感触があるのを確認して巫女を見つめる。
「その目の奥で何を考えてるのかは分かっているぞ？」
「お前は誰だ？」
確認の意味を込めて警戒色で聞く。
「見ての通り、私はレアだが？」
「一つだけ聞きたいことがある」
ディルクがレアの右目を見据えた。
「言ってみろ」
「その左目が全ての元凶か？」
「言葉の真意を測りかねる」
「その左目があるせいで、そんなことをしているのかと聞いているんだ！」

「私は……私は私だ。左目は後付けされた物に過ぎない」
レアは言い淀み、ディルクから目を逸らした。
「そうか」
ディルクはレアに近づき始めた。ディルクはズボンの裾を少し上げナイフを手に取り、レアの手を握った。
「は、はなせっ！」
レアが狼狽える。ステーンが短剣を抜き、ディルクに向ける。
「船長さん、さっきのことあんたにも聞くけど、レアがこんな風に振る舞ってるのは、あんたらがやらせてる事なのか？」
「そうだと言ったらどうする？」
「どうもしない」
さっきまでの背中を濡らしてた汗が、火照った胸の内を冷やしてくれる。この部屋に入ったときから感じていた居心地の悪さは、あるべき物があるべき所にきちんと収まってない事から来るとはっきりと理解した。それならすることは必然的に決まってくる。
「逃げ道はどこ？」
ディルクは視線をステーンの持つ刃に向けたまま、レアにいつもの口調で尋ねた。
「誰が逃げ道なんて教えるものか」
「この部屋の扉は私の後ろの一つだけだ。諦めろ」
ステーンがディルクにじりじりと間を詰めながら、冷たく言い放った。
「そう」
ディルクが体を沈め、足を浮かせた。
「後十秒」
ディルクが聞き直す前に、レアは手を振り解き後ろに下がった。ディルクは二の足を踏んだ。
その直後、レアの座っていた玉座の右後ろの壁が、開け放たれた。そこから銃を構えたエリクが駈け出てくる。エリクは周りを見渡してから、ステーンに銃を向けた。

「あなたはレアを連れて、さっさと逃げてください。僕はこの人に少し聞きたいことがあります」
エリクはディルクを一瞥して、直ぐにステーンに向き直った。ディルクはレアの手を引いて、エリクの現れたところへと走っていった。

▽

エリクはステーンに向いたまま、開け放たれたままの扉を閉めた。
「聞きたい事って何だ？」
「少し疑問を解消しようと思いましてね。ただの気まぐれです」
エリクはステーンを見て口元を緩めた。
「何で急にレアの居場所が分かったんですか？」
「……君は何者だ？　何を知っている？」
ステーンが訝しげな眼差しを向けた。
「僕は下働きの料理人の弟子です。ただの、ね」
「そうか。だが、お前なんかに構ってる暇はない」
ステーンが自分の胸ポケットから五センチ程の大きさの箱を取り出し、その中央に付いているボタンを押した。部屋中に、建物中に、非常事態を知らせる警告の、独特の耳障りな音がけたたましく鳴り響いた。
「直ぐに、城にいる者達がこの部屋に集まってくる。観念しろ」
「諦めても良いですけど、質問には答えてください」
「直ぐに処刑される者に何を言っても意味はなさないが、冥土の土産に教えてやろう」
「僕があなたに銃を向けている状況だって分かってますか？」
「私が話すまでお前は撃たんだろう？　それとも私以外の者から聞くか？」

エリクは銃を向けたまま押し黙った。
「おそらく、私と共に船に乗った者に聞き出そうとでもしたんだろうが、何も聞けなかったのだろう？　あの船に乗ってた者で事情を知ってる者はいないからな。さて、何が聞きたいんだったかな？」
「レアの居場所をどうやって突き止めたんですか？　これまでも散々調べて有力な情報は何一つ得られなかったじゃないですか」
「コルスカンドの化け物は知ってるか？」
「想像の埒外のことをやってのける、あの科学者のことですか」
「そうだ。サーキュリウルの奴が情報源だ」
「やっぱりコルスカンドですか」
「満足か？」
「ええ、確信を得られたので」
エリクはそう言うと、玉座の後ろへと回り床を跳ね上げた。中から隠されていた階段が現れる。
それと同時に、ステーンの後ろの扉が開き、武装した警備の者達が雪崩込んできた。警備の者達がエリクに向けて発砲するよりも早く、エリクは階段を駆け下りた。警備兵達がエリクに続いて、中に入ろうとするのをステーンが留めた。
「放っておけ、それよりも先に巫女様だ」
ステーンが警備兵達に指示を出し、自らは階段を下りていった。

▽

エリクと別れたディルクは明かりの全くないどこまで続くのか分からない通路を慎重に進んでいた。レアはディルクの手を握り、大人しく付き従っている。
しばらく進むと、壁面に火の付いた松明が一つだけ掲げられている少し開けた場所に出た。恐らくエリクが火を付けたのだろう。デ

ィルクはレアの手を離し、向き直った。
「レア、君が何を考えてるのかは分からないけど、無理をしてるのは分かる。何かをしようと一生懸命なのも分かるし、嫌な事もしたんだなって思う。でも、それは自分を犠牲にしてもいいって事じゃない」
「うるさい！　なんにも私の事知らないくせに、知ったような事を言うな！」
　さっきからレアの様子がおかしい。エリクと別れた時から、必要以上に感情的になってる気がする。
「まだ、あんまり知らないけど、寝食を共にした仲、なんだろ？」
　レアがディルクの顔を見上げ、自分の右目を閉じた。雰囲気が懐かしい感じに戻った気がする。
「ディルクは……ディルクはこの目の事を知ってるの？」
「知らなかったけど、神格連鎖機構っていうものだって教えてもらった」
「この目はね、昔読んだ資料をそのまま言わせてもらうけど、ある一つの点について確定した事象と不確定の事象、つまり過去と未来の事なんだけど、それら全部を同時に脳に焼き付けるの。言ってる意味分かる？」
「あんまり……」
「例えば、ある人がいたとするでしょ。その人についてこの目を使うと、その人が子宮の中にいる所から自然に還るまでが全部、映像として同時に頭に流れ込んでくるの」
　レアが手振りまで付けてくれたが、分からない。
「何となくは分かった。けど、理解できない」
「分かってないんじゃ」
「まず映像が同時に流れ込むってのがどうもなぁ」
「三年前、私はこの目でエリクについて見たの。そしたら一番最初に鮮明に見えたのが、お兄ちゃんが殺されるところだった。だから私はそれが起きないようにしようと、一生懸命頑張ったのに。それ

なのに……」
　レアは言葉の途中で嗚咽を漏らし、言葉を紡ぐのを止めた。ディルクが俯いたレアの頭に手を乗せて、優しく撫でた。そして、強く撫でて銀髪を乱すと、しゃがんでレアに目を合わせた。
「レアは一人でよくやったよ。だから、これからは、オレとイリヤも手伝うから、そしたらみんなでここから出よう。ね？」
　レアが小さく肯いたのを確認したディルクは、よし、と声を出して膝を伸ばした。レアの酷く小さな冷たい手を優しく、けれど力強く握って歩き始めた。
「その目は使わなくても良いから。絶対に無理はしないで」
　レアが洟を啜りながら、うん、と小さな声で答えた。ディルクは松明を手に取り、先を照らした。埃だらけの床に、おそらくエリクの物だと思われる足跡が暗闇の中に続いていた。
　足跡を辿っていくと壁に突き当たった。おそらく隠し扉になっていると判断したディルクは、壁に手を着いて、開くところを探した。ちょうどディルクの腰のあたりにずれそうな亀裂を見つけ、それをなぞり指を引っ掛けることの出来る場所に触れた。
「ここから先はたぶん、逃げ回らないといけないけど、準備は良い？」
　ディルクが無理をして口に笑いを作り、レアに訊くとレアが握っている手に力を込めて握り直した。
「行くよ」
　ディルクが声を出すのと同時に、慎重すぎるくらいゆっくりと、音を立てないように壁を引っ張った。ディルクがまず、顔を出して周りに人がいないのを確認してからレアを外に出す。ディルクは目立つ松明を置いてから、壁を元通りにはめ直した。松明を置いて空いた右手でナイフを握り、震えるレアの手を左手で包みこんだ。
　足音を立てないようにゆっくりと廊下を進み始めた二人は往生していた。廊下が交差する度に、警備の声や足音が聞こえ、少し道を戻れば金属が擦れる音が聞こえてくる。歩みを進めても、外に出る

ことは出来ず、ただただ同じ所をグルグルと回っていた。
「やっぱり私、目を使おうか？」
レアが不安そうにディルクに提案した。
「いい。何とかするから」
ディルクは何とかすると言ったが、内心かなり焦っていた。時間が経つにつれ城内を見回る兵は増える一方で、事実先程から扉の影を行ったり来たりするだけで、ちっとも先には進めていなかった。それに加え、今現在のイリヤとエリクの事も気に掛かっていた。イリヤは上手く立ち回れたのか。エリクはまだ生きているのか。そして、自分はここから逃げることが出来るのか。
ディルクは頭を掻いて、自分のするべき事を決めた。レアを守る。今はそれしか出来ない。やらなければいけない、他に守ってあげることの出来る人がいないのだから。ディルクは不安そうなレアの頭を撫でた。
「大丈夫だから」
ディルクは自分に言い聞かせるようにそう呟いて、廊下を歩き始めた。最初の曲がり角で警備の持つ懐中電灯の明かりが、こちらに向かって伸びているのを確認すると、すぐさま方向を変えて近くの部屋に飛び込んだ。そこは客室のようで、クローゼットにベット、小さな円テーブルと大した物は置かれていない。
ディルクは窓際に近づきカーテンを引いて、レアと共にベランダに出た。その直後、扉の隙間から光の直線が、話し声と共に入ってきた。ディルクは神経を研ぎ澄まし聞き耳を立て、息を殺した。
入ってきた三人の兵の内二人がベッドの下を覗いたり、クローゼットの中を調べたりと、距離を詰めてくる。そして一人がカーテンに手を掛けた。ディルクの心臓が早鐘を打ち、額からの汗が頬を伝って地面に落ちた。
「おい、反対の方でガラスの割れる音が聞こえたらしいぞ」
扉の近くに居た軍人が通りかかった軍人との会話を部屋の仲間に伝えた。そして、三人は駆け足で部屋から出て行った。

ディルクは部屋が無人になったのを確認すると、中に入って胸を撫で下ろした。
「運が良かったけど、二人とも大丈夫だよな」
ディルクが聞こえるか否か微妙な声量で独りごちた。

夜襲（3）

男は周りが忙しなく足音を立て続ける隙間を悠々と歩き、そこだけ隔離された空間のような静けさの部屋に入った。消毒液の臭いが鼻にくる。いくつもの寝台が備え付けられた白を基調とした清潔なイメージの部屋で、男は雑多に薬瓶が置かれた棚へと近づいた。その棚からいくつかの瓶を手慣れた様子で抱え込み、その下にある引き出しから、ガーゼと包帯を取り出した。そして、近くのベッドに腰を沈み込ませた。

「まさか医者までかり出されてるとはな。まぁそれだけここでも、神格連鎖機構が重要視されていると言うことか」

男は誰に聞かせるでもなく、虚空に向かってそう言うと、自分の服をまくり上げた。右脇から臍に至るまでの浅い切り傷が外気に晒された。男がガーゼに消毒液をしみこませ、傷口に当てる。小さく息のような声を漏らして、別のガーゼに同様に液をしみこませ頬に付いたいくつもの切り傷を拭った。

男は腹部の傷に不器用に包帯を巻きつけ、服を着直してから立ち上がった。整理されたファイルが並ぶ白い棚に近づき錠の掛かったガラス戸を懐から取り出した特殊警棒で打ち抜いた。ガラス片が音を立てて、床に当たり散乱する。

男は破片に気を付けながら一冊のファイルを取りだした。その中身に軽く目を通して、小脇に抱え棚に背を向けた。その時、棚の下方に付いている引き戸が、ガタンっと音を立て、男は身を小さく震わせた。

男がファイルをベッドへと投げだし、警棒を構えた。引き戸が乱暴に吹き飛ばされ、中から身を低くしたエリクが走り出てきた。男が突っこんで来るエリクの足を引っかけると勢いの付いていたエリクは派手に転がり、頭から壁へと激突した。エリクは後頭部を押さ

え蹲った。
男はエリクの左腕を掴み、背中へと回し膝で押さえつけた。そして、エリクの髪を掴み顔を自分の方へと向けた。
「どこかで、見た顔だな」
男が首を傾げたのと同時に、男の背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「まさか、こんな所に通じていたとはな。大尉、そこで何をやっている？」
大尉は顔だけをステーンに向けた。
「大臣こそこんな時に、うろつき回っていてもよろしいのですか？たしか緊急招集が掛かっていたと記憶しておりますが」
「私の事はいい。それよりそいつを連れてこい。聞きたいことが山ほどある」
ステーンは集まり始めた兵士の合間を抜けて廊下へと出た。エリクが大尉に無理矢理立たせられ、歩くように促された。
「コイツを頼む」
大尉は近くにいた兵にエリクをまかせると、ベッドの上に放り投げたファイルを拾い、ステーンと逆方向に歩いていった。

▽

ディルクはレアの手を引っ張り、隠れていた部屋から出ると迷わず走り出した。警備が手薄になっている隙に、ここから逃げ出すためだ。どこまで逃げ延びることができるかは分からないが、行けるところまで走り続ける。
途中で見つけた階段を下りしばらく走り続けると、レアがいきな

り足を止めた。それにつられ、ディルクも足を止める。
「どうし……」
ディルクはレアに尋ねるのと同時に、複数の足音がするのに気付いた。しかし、気付くのが少し遅すぎた。窓からはいる月明かりに照らされた三人の兵士が、ディルク達に銃を向けた。
「……しまった」
ディルクが横を見遣ると、レアは目の前の三人を見据えていた。レアは右目を瞑った。
「レア？」
ディルクが握る手に込める力を少し強くする。レアはディルクの言葉には一切反応せずに、真っ直ぐに三人の先を見ていた。
「巫女様から離れ、武器を捨てろ」
ディルクは一歩横にずれて、手に持つナイフを放した。それを見て、一人の兵士が前へと進みレアの右腕を取った。レアが体勢を崩し、前のめりに倒れる。ディルクは反射的に体を動かす。その横を何かが掠め、ディルクは静止した。飛んできた方向を見ると、中央に構えた兵の持つ銃から煙が出ていた。
「動くな」
ディルクは発砲した男に怯み、動き出すことができなかった。その間にレアが兵士に起こされ、顔をディルクの方へと向けた。レアは相変わらず右目を閉じたままだったが、琥珀色（アンバー）だったはずの左目は真っ暗で、まるで虚のようだった。しかし、その色も一瞬で変わり、様々な色が縦横無尽に泳ぎ回り、溢れるかと思えば、混濁し真黒を辿り、元の琥珀色に落ち着いた。そしてレアは右目を開いた。
兵士に無理に腕を引っ張られて行くレアは、顔を背ける間際に口を動かした。
だいじょうぶ。
ディルクはレアの言葉に耳を疑った。この状況で大丈夫なはずが

ない。打破するには幾分材料が少なすぎる。いくらレアが神格連鎖機構の左目を所持しているからといって、攻撃されない理由にはならないし、ましてディルクがどうなるか何て想像に難くない。

レアが三人に囲まれる前にと、ディルクは意を決し、身を屈めた。ディルクがナイフを握った瞬間、ガラスが粉々に吹き飛び、窓の横にいた二人の兵士に降りかかった。ガラスが床に当たり砕ける音と共に、兵士が一人倒れた。男のこめかみの辺りから紅い液体が流れ出していく。

残りの二人の兵士が怯み後退ったところで、壁に何かが当たる音がした。そして、窓際の兵士の左腕が吹き飛んだ。生々しい液を纏った肉片が壁に当たり、ぐちゃり、と耳障りの悪い音がする。兵士が傷口に右手を当てると、脇腹から血を吹き出して、横になった。

ディルクはナイフを握り込み、叫びながら、現状に追いついていない、レアを掴んだ兵士へと走り寄った。肩から兵士にぶつかると、レアが兵士から離れた。勢いの付いたディルクはよろめいた兵士にのしかかるように、倒れ込んだ。ディルクが両手を地面について体を起こし、レアの方へと振り返った。

レアは真っ直ぐとディルクの方を見ていた。捕まれた腕を押さえてはいるが、目立った傷はない。ディルクは、押し倒した兵士を見た。兵士の背中には銀の刃が血に濡れて、堂として立っていた。兵士は俯せのまま動かない。だめ押しのように飛び込んできた弾丸が兵士の頭を貫き、血飛沫を上げディルクを濡らした。

……刺した。

刺して、殺した？

ナイフで刺して殺した、人を。

「……あ、ア、アアアアァァッ！！」

ディルクは自分の血に染まった両手を見て、震え、頭を抱えた。獣のような咆吼を上げ、慟哭し、自分の中にあった物を勢いよく吐き出した。濡れた地面に両手をついて、頭を垂れ、蹲った。

「……い」

ディルクはなおも叫び続ける。声に飲まれた音にも気付かずに。
レアがディルクに近づき、右腕を取った。そして袖をまくり、腕輪型の情報表示端末（インパース）に触れた。直後、大声が拡がった。
「オイッ！　聞け！　この愚図が」
レアがディルクの耳元に、大音量を発する腕輪を近づけた。
「……い、イリヤ？」
「レアを連れて今すぐに、その窓から外に出ろ」
いつも通りの冷静な声音がディルクの耳に届いた。
「オレ……ひっ、人を殺した……」
ディルクが弱々しく呟いた。
「お前は誰も殺しちゃいない」
イリヤが穏やかな口調でゆっくりと言った。
「でも、刺して、動かなかった」
「あぁ、刺したな。でも、お前の短いナイフの刃が少ししか刺さってない状態で、人は死なない。そいつは俺が頭を撃ち抜いた。分かったらさっさと出ろ。騒ぎすぎたせいで、兵達が集まり始めてる」
「で、でも」
「うるさい！　うだうだ言ってないで逃げろって言ってんだ。さっさと出て来い」
イリヤが怒りまくし上げた。
「よくやった」
最後に静かな声で声を掛けて、通信を切った。レアがディルクの腕を取って立ち上がらせ、破片に気を付けて、窓から外へ飛び出した。

夜襲（4）

ディルクはレアに腕を引かれるまま、月下を駆けていた。足取りは重く、レアが手を離せばすぐにでも地面に膝をつき、圧し潰されてしまいそうだ。

城壁に沿って走っていると、正門へと通じる広場に出た。レアは門を見つけると、自然と足を早めた。不自然なほど静かな広場と閉ざされている門は、暗闇の中にぽっかりと口を開けて待っている獣にしか見えなかったが、それでも城外へと通ずる門はひどく魅力的で、警戒することも忘れてレアはディルクを引っ張ってふらふらと近づいていった。

広場の真ん中に位置する水のない噴水にさしかかると、両横から強烈な光が発せられた。レアとディルクは突然の光に驚き目を閉じた。周囲でたくさんの人が動く気配がし、ディルク達が次に目を開いたときには、門の前に武装した兵士が立ち並び、支給されている銃を皆一様に構えていた。ディルクは状況を理解しきれていないままレアの手を離し、レアを銃口から隠すように兵士の前に立ちはだかった。

都王が兵士の合間を縫ってディルクの目の前に姿を現した。周りの兵士に守られるように立つも、謁見の間にて纏っていた微々たる王の威厳は、黒を基調とした赤いラインと銀の細々とした装飾をふんだんにあしらった正装によって、幾らか増しになっている。都王は一歩前に出て、ディルクの目を見据えた。

「巫女様をこちらに渡してもらえるかな」

「無理だ」

虚勢を張るディルクの袖をつかんだレアの目にも拒絶の色が浮かんでいる。

「そうか。なら実力行使で引き渡してもらうが、構わないよな」

都王が口を閉じると同時に、都王の左右に控えていた側近二人が銃を手放し前に出た。長身痩躯の側近が仕事だから仕方がないといった、嫌そうな顔で欠伸をしながら歩くのに対し、筋骨隆々の側近は拳で肉を撃つのが楽しみで仕方がないといった様子で、立派な口ひげを蓄えた口を汚く歪めた。

側近二人が同時に左腕に填めたゴツゴツと角張った黒い腕輪に右手をあてがった。黒い腕輪についている二つの光源が赤い光を点(とも)すと同時に、長身痩躯の男の姿が消えた。唖然とするディルクの頭が跳んだレアに押さえつけられた。ディルクがされるがままに頭を下げると、頭上を風が走り抜けた。レアから離れ、自然と風の流れを追ったディルクの視線の先に長い足が迫り、ディルクの体を吹き飛ばした。

地面を二転三転と転がったディルクは鼻を押さえながら立ち上がった。派手に転がった割には、蹴られた鼻以外にはたいしたダメージはない。鼻から流れ出した血が顔を滑りぽたりぽたりと落ちて、乾いた地面に吸収されていく。心配そうにディルクに顔を向けるレアの左目では多種の色が泳ぎ回っていた。

「やけに頑丈だな。首は折れてもいいと思ったんだが」

ディルクを蹴り飛ばした男が不思議そうに首をかしげた。

「不意打ちで仕留めきれないほど腕が落ちたか？」

大柄の男はそう言って肩を回した。男が噴水に取り付けられている石で出来た球体を殴りつけると、球が砕け礫となりディルク達に向かって飛んでいった。ディルクが跳び駆け、反応できなかったレアに覆い被さり二人して地面に倒れ込んだ。背中に飛来した破片を受けたディルクが痛みにうめく。

「大丈夫？」

ディルクの下からレアが訊いた。ディルクがレアの上から反転して横に移動して起き上がる。起き上がろうとするレアに手を差しのべ立ち上がらせると、痛みに歪んだ顔を繕いながら、多勢の兵達の前にいる二人を睨み付けた。

「レア、逃げ切れる？」
「ちょっと待って」
大柄の男がディルクの眼前に迫り、両腕を振り上げた。
「二人きりでしゃべって余裕だな」
男が腕を振り下ろすのに合わせて横へと跳んだディルクは、腰を低く落とし男の次撃に備えた。
「ディルク、後ろ！」
レアの叫びに反応し後ろを振り向くと、細身の男がディルクを蹴り飛ばそうとしていた。とっさに顔面を両腕で覆った直後に先ほどと同じくらいの重さの蹴りが入った。ディルクがよろけ後退る。
「チッ、厄介な指示出しやがって」
「先に巫女を押さえとけ、デフロット。少年は俺がやっとく」
「了解、ニーコ」
デフロットと呼ばれた痩躯の男はディルクに背を向け、レアに向かって歩き出した。ディルクはデフロットに向かって走り出した。
「だから、少年の相手は俺だって」
ニーコという大男がディルクの横から殴りかかった。ディルクはそれを避けてニーコへと向き直る。ディルクは舌打ちをして新たに男が繰り出した拳を避けた。

▽

一方、レアは神格連鎖機構を使用したまま、歩み寄るデフロットに視線を向けた。手を伸ばせば届く距離までお互いが接近するとレアはデフロットと両眼を合わせた。
「逃げないのか？」

「あなたこそ、そこにいると危ないですよ」
「ハッタリか？」
「どうでしょう？」
レアは不釣り合いな巫女としての冷たい笑みを浮かべた。デフロットは逡巡した後、レアに右手を伸ばした。デフロットがレアをつかもうと手を握り込むが、レアはゆらりと一歩後ろに下がりその手を避けた。レアは冷たい笑みを浮かべたまま口を開く。
「だから言ったでしょう」
伸ばしたままのデフロットの上腕の一部がえぐり取られたように穿たれた。デフロットが右手を押さえ銃弾が飛んできた方を睨み付ける。視線の先にはオレンジのゴーグルをした男が拳銃を構えていた。男の後ろから虫の大群のようなものが迫り、銃を構えていた兵士達へと襲いかかった。兵士達が突然の襲撃に混乱し、むやみに銃を放った。無差別に放たれた銃撃は男の第一撃滅群（ファースト・クラスター）だけでなく味方にも襲いかかる。銃声と炸裂音が悲鳴を呼び兵士達の士気を下げる。男は混乱している兵達を横目にゆったりした歩調でレア達に近づいた。
「どこかで見た顔だな？」
「……イリヤか」
デフロットが男の名を呼び歯軋りをした。イリヤはデフロットに照準を合わせ引き金を引いた。放たれた銃弾は、デフロットに当たることはなく直線運動を続けている。イリヤはとっさに横に飛んだデフロットに銃口を向け、再度弾を放った。デフロットは身を低くし、イリヤから離れるように物陰へと走る。デフロットが照明装置の陰に隠れるのを確認したイリヤはレアに近づいた。
「遅くなった」
「大丈夫、ディルクが守ってくれてたから」
レアはニーコと交戦中のディルクに目を向けた。つられてイリヤも目を向ける。争乱の中でニーコの繰り出す拳をひたすらに避け続けるディルクに向けてイリヤは大声を出した。

イリヤは届いたかどうか確認せずに、レアに水のない噴水の中で丸く縮こまってるように指示を出し、デフロットに向き直った。空になった弾倉を取り替えて、照明装置に向けて走り出す。

迫るイリヤから離れ、デフロットは狂騒の中に逃げ込んだ。倒れている兵士の腰に付いているホルスターから拳銃を抜き取り、イリヤに振り返った。そして引き金を引いた。

デフロットの放った銃弾が照明の光源を破壊し、二発三発と続くと完全に照明機器としての役割を失い、二人の周りに暗闇を落とした。イリヤが降り注ぐ欠片に足を止め、ゴーグル越しに左目を閉じた。

イリヤの右上方から頭目掛けて蹴りが繰り出された。イリヤはそれを右腕で受け止め、左手の銃口を向けた。デフロットは引き金が引かれるより早く身をかがめ着地し、銃弾をかわすとすぐさま地面に左手を着き、躯を捻ってイリヤの胸部に向けて右足を突き出す。

胸をねらった攻撃を両腕で上下から挟み込み相手の足を封じると、イリヤは自身の体を後方に引いてデフロットのバランスを崩した。両手を宙にさまよわせ、背中を地面につけたデフロットに容赦なく銃口を突きつける。

「どうやら勘違いみたいだ」

イリヤは無抵抗になった足を離した。自身の顔に付いた血を拭い、水のない噴水へと足を向けた。

▽

腕のユニットを足に付け替えろ。イリヤの放った言葉だ。ハンスから貰った四肢に填めた環状の身体強化ユニットの事だろうが、付

けたからといってなんら強化されたという実感はない。
　ディルクは突き出された拳を頬のすれすれでかわし、左腕のユニットに手をかけた。手の中にがちゃりと、外れた曲線が収まり、体を折り曲げ左足に填め直す。同様に右足にも。付け替えたから強くなったという感じはなく、逆に両の足に四つも付けたせいで普段より重く、締め付けられ動きづらくもある。
　足をねらった攻撃を普段よりも力を込めて飛んだディルクは、自分の跳躍した高さに驚愕した。二メートル程の身長があるニーコの頭上よりも高く飛び、ニーコの後方に着地しよろけた。
「もらった！」
　ニーコの低い声とともに繰り出された右拳を、後ろに下がりながら左手で防いだ。ディルクは左手を押さえながら狂騒の中へと飛び込んだ。銃弾の飛び交う中を身を低くし、ニーコの視界から隠れるように走る。
　第一撃滅群を数機、無力化した兵士の一人が走るディルクに目を付けた。周りの第一撃滅群が自分に狙いを定めてないことを確認し、ディルクに向けて発砲した。金属音が響く。
　ディルクが音を耳にし足を止め振り返ると、銀色をした菱形の浮遊物が飛来するのが兵士越しに見えた。兵士の首をかすめ、ディルクの近くに拉げた銃弾とともに転がっていた同種の菱形、第二守護群（セカンド・クラスター）と同調して一つの銀のナイフを形造った。ディルクは数歩戻りそれを握り、倒れた兵士を一別してから駆けだした。
　視界から脱したディルクを探して、狂乱の中をキョロキョロと見渡しているニーコの背後に回ったディルクは、足を止めた。ニーコを見定め、ナイフを強く握り込む。一呼吸。深く息を吸い込み、一瞬息を止める。周りの騒音を意識からシャットアウトし、ニーコだけを鮮明に、動きを細かくとらえる。そして静かに細く長く息を吐いた。
　ディルクはニーコに向かって走り込む。砂利を蹴り上げ、倒れている兵士を飛び越して、ニーコへと迫る。腕の届く距離まで加速し

てナイフをつかんだ右手を突き出した。と同時に、足音に気付いたニーコが振り向いた。
ディルクはナイフを手放した。ニーコが自身に刺さったナイフを乱暴に抜き取り投げ捨てる。地面を滑りディルクの足下へと滑っていきディルクの靴先に当たると静止した。ニーコは自身の右目を押さえながら、喚き叫ぶ。そして、ディルクを睨め付けると狂乱の中へと姿を消した。ディルクは呼吸を整えながら未だ収まらぬ、煙の上がる機械と人間の戦いを見つめていた。

夜襲（5）

ディルクは逃げたニーコの行方を捜して、群衆の中を見回していたが、その姿をとうとう見つけることはできなかった。ディルクはイリヤの進む先の、水のない噴水へと足を向けた。噴水へと駆け寄り、レアの身の安全を確認するとイリヤへと顔を向ける。

「よかった、無事だったのか」

「ああ、今はたいした傷はない。それよりも、どうやって逃げるか、だ」

イリヤが情勢を見るために、狂乱へと視線を移した。イリヤの放った第一撃滅群（ファースト・クラスター）は兵士たちにあらかた掃討され、残った第一撃滅群も自爆を開始し、兵士たちの動きを牽制している。

「イリヤの入ってきたところからは逃げられないのか？」

ディルクがイリヤの顔を見上げながら提案する。

「無理だな。近くの建物の屋上から外壁を飛び越えてきたからな。こっちからだと無理がある。エリクがいれば地下通路から逃げられるんだが」

イリヤがレアを噴水の外へと出して、ディルクに添うように指示をした。イリヤはディルクに銃を渡すと、倒れている兵士に向かって走っていった。

イリヤは倒れてる兵士に近づき、腕につけていた情報端末を剥奪する。奪い取った端末を操作し、地下通路の地図がインプットされていることを確認した。

第一撃滅群の攻撃から立ち直った、空中都市勢が吼える。都王が男を引きずり、ディルクの前に出た。都王は男、エリクを地面にうつぶせに倒し、蹴り飛ばした。後ろ手に拘束されているエリクは無抵抗にうめく。

「エリク！」

「すべての元凶はこいつなのだ。こいつが巫女をリセットして持ち

去らねば、こんな事にはならなかった。巫女をここでいつまでも使ってやれたというのに」
「何を言ってやがる。悪いのはお前らだろっ！」
ディルクが都王に感情にまかせて、かみついた。
「お前らがレアを私利私欲のために、道具みたいに使うから。だからエリクがレアを助け出したんだ！　レアがエリクを助けようとしてるみたいに。お前らには違法でもエリクには筋が通っている。なんで、お前らみたいなのがこんな所で、のうのうと生きているんだ！」
「地上の人間が善悪を説くなんて、おこがましい。お前らが悪だから堕とされたのだ。我々のしている事が相対的に正しい。巫女をこちらに渡せ」
「断るっ！」
都王が近くにいた兵士から拳銃を受け取り、エリクに銃口を向ける。
「五秒だ。こいつはお前らの仲間だろう。殺されたくなければ、言う事を聞け。五、四……」
都王のカウントダウンに揺れるディルクの手から、レアが銃を両手で抜き取る。自分の頭に銃口を向けレアが叫ぶ。
「私が死ぬっ！」
「やめろ、レア！　何とかするから銃を渡して」
「……一。やれるものならやってみろ。巫女が使えなくなるのは痛いが、他国に使われるよりはましだ」
ディルクが宥め、都王が煽る。レアが二人の顔を交互に見やり、目を固く瞑った。
「レア、お前が死んでも死ななくても、こいつはエリクを撃つ。死んだら死んだで、神格連鎖機構であるその左目を抜き取り、別の適合者に与え使役する。レアが自決してもただの犬死ににしかならない。だから生きろ！　生きてその目を誰にも渡すな！　それが最良だ」

イリヤが離れた場所からレアに語りかけた。レアが潤んだ目をゆっくりと開き、両腕から力を抜いた。だらりとぶら下がった手の中から銃が滑り、ゆっくりと回転しながら落ちる。地面に横たわる銃口の先に、一滴（ひとしずく）が落ち、地面を丸くぬらした。

「私は、何もできない」

突如、爆音が空を衝き、夜が赤く染まっていった。それと同時に、敵勢の動きが止まった。

「貴様ら、私の城に一体何をした！」

都王が今までにないような感情の高ぶりを見せた。その慌てぶりはあまりにも異常すぎるように思えた。ディルクが都王の視線の先に目をやると、なぜか城が燃えていた。

「なぜ誰も気が付かなかった！　早く、早く火を消せ！　大変なことになるぞ！」

都王が呆然とする兵士たちに命じた。レアが小さな声で何かを呟いた。聞き取れなかったディルクがレアに問いかけると、レアは松明と再度呟いた。

どうやら、見つからないようにと置いていった松明の火が何かに引火して、城中に張り巡らされた、秘密の通路を通って城の内部を炎に包んだらしい。そしてその炎が今爆発を伴って、爆発的に表面を炎で覆ったのだろう。

空中都市勢が戸惑っている間にエリクは、足を上手く使い立ち上がり、レアの方へと駆けだした。エリクは地面を強く蹴り、一歩ずつ着実にレアへ近づいていった。レアの口元が少しだけほころんだ。

エリクがレアまで後三歩というところで、笑みを浮かべた。

炸裂。

エリクは何が起きたのか分からないという顔をした。そして兄妹そろって、顔色が絶望に染まる。

破裂。

エリクの腹部にあいた二カ所の穴から血が流れ出す。血液を浴びたレアが一歩前にゆっくりと出た。

卑劣な決裂。
エリクが膝をつき、そのまま前に倒れ込む。地面に伏して目を開けたまま言葉にならない呻きをあげる。その目の端には涙が浮かんでいる。レアがエリクを仰向けにして、傷口を押さえた。二人の目から涙が一筋、頬を辿る。
左目で見ていた最悪なシナリオが色と光を伴い、現実へと侵略を開始した。レアが嗚咽を漏らしながら必死にちいさな両手で傷口を押さえつける。それでも無情に無常に、時間とともに血が溢れていく。
異質な力をその体に宿していても、ちいさな彼女には兄一人、たった一人の肉親のいのちが小さくなっていくのを止めることすら出来ない。彼女は慟哭の最中で、何度も何度も何度も何度もその名を叫び、こちらに引き留めようとし続けた。かの兄は、その叫びを聞きながら、ひどくゆがんだ笑みを浮かべ目を閉じた。
端で一連を見ていたディルクが、目の前でエリクを射貫いた、都王の拳銃を握ったステーン・アスペル目掛けて走り出した。ステーンがディルクに照準を定める。ディルクが兄妹の横を駆け抜ける。
トリガーが引かれた。
正反対の速度のベクトルを持つ二つが、頭から同一物に衝突する。銃弾はひしゃげ、ディルクは頭から血を垂らす。血とともに怒りも流れ出したのか、おとなしく足を止め、目の前に突如現れた銀の壁を見上げた。菱形の模様が全体に施されたその壁は、じりじりとディルクの方へと移動し、後退させる。
ディルクとステーンは同時に妨害者へと目を向ける。ただその視線に込められたものもまた対する、怒りと謝罪。妨害者は怒りにまかせて突っ込んでいったディルクに冷ややかな目を向けていた。
ディルクは壁、もとい第二守護群（セカンド・クラスター）に押され兄妹の所まで下がった。イリヤはステーンと壁の間に立った。ステーンはあきらめたように銃を下ろし、イリヤへと疑問を投げかけた。
「なぜお前は、そんなことをする。お前は一体何を考えている？

お前は一体何なんだ？」
「俺はお前たちの言うところの殺戮兵器だ。殺戮兵器の考えることが分かった時点で、お前も俺と同類になる」
「殺戮兵器が化物を飼い慣らすのか。それは笑えない冗談だ。はぁ、この国もひとまず終わりだ。ならば、私は一足先に席を外すことにしよう」
ステーンはそう言ってから自分の頭を吹き飛ばした。抜け殻が地面に横たわった。
敵勢がディルクたちを疎かにして、慌ただしく消火を試みる。その隙にと、イリヤは第二守護群の影の三人へと近づいた。
「あいつらなんであっちを優先するんだ？」
「後で話してやる。それよりもお前はレアを連れて先に行け。俺はこいつを運んでく」
ディルクの疑問を保留して、イリヤは地下通路の地図のデータが入った端末を、ディルクに手渡した。ディルクは逃走経路を確認すると、涙をぼろぼろと流し続ける、レアの腕を引いて、走り始めた。何度も後ろを振り返りながら、二人は地下通路へと入っていった。
イリヤは、壁をなしていた第二守護群を用いて、傷口を塞ぎ、さらにエリクの体全体を包み込み、これ以上傷つくことのないように丁重に運んだ。
一度、イリヤが地下通路へと向かう際に、王の命令を無視して発砲した兵士がいたが、イリヤはそれを無理に相手にせず、地下通路へと消えていった。後には燃えさかる炎と都王の怒声、兵士達の令号が残っていた。

エピローグ

ディルク達は最初に案内された宿に逃げ込んでいた。レアは顔を伏せたまま嗚咽を漏らし、ディルクはレアにどう接しようかと迷い、結果何も出来ずに立ったまま、レアの震える背中を見ていた。イリヤはエリクをレアから離すように、建物の奥へと運び、ソフィーと老婆へと横たわらせた。

「エリクがこんな事になって申し訳ないが、俺にはどうすることもできなかった」

イリヤはソフィーと老婆に向かい、深く頭を下げた。ソフィーはエリクに寄り添い、涙をこらえながら声を殺し、老婆は目に涙を湛えながら、イリヤに頭を上げるように促したが、それでもなお、イリヤは頭を上げようとはしなかった。

「あんたはよくやってくれたよ。レアを無事に連れてきてくれたじゃないか。それに、エリクにも尽くしてくれた」

事実、ソフィーの上体がのしかかっており、隠れて確認することはできないが、エリクの腹部には幾重にも包帯が巻かれている。イリヤが逃走する最中に、応急処置を施したものだ。ただ、その処置でエリクが目を覚ますことはなかった。

「本当にすまない」

イリヤの言葉に老婆がとんでもない、と返した。

「元々この子は三年前に、命を失うと予言された。それでも、その予言から三年も生き存えてくれた。私にとってのこの三年間は、いわばラグみたいなもんさ。いつ終わっても仕方がないことだったんだよ……」

老婆はイリヤの頭を両手で掴み無理矢理前を向かせると、ポケットから一通の封筒を取り出しイリヤに握らせた。

「これを、レアに渡しておくれ。エリクが書いたものだ」

イリヤはそれを確認すると、部屋から出て扉を閉めた。扉越しに

二人分の泣き声が聞こえてきたが、イリヤはそれを無視した。
レアが赤くなった目でイリヤを見つけると、立ち上がってイリヤの服につかみかかった。
「お兄ちゃんは……お兄ちゃんは死んじゃったの？」
イリヤはレアの目を見つめ返し、封筒を渡した。レアが封筒にエリクの名前が書かれているのを見つけると、それを乱暴に開封し中の手紙を取り出した。三つ折りにされた手紙を広げるとレアは熱心に読み始めた。

僕の唯一の肉親であり最愛のレアへ。
レア、君がこの手紙を読んでいる頃には、僕はもう君を抱きしめることはできないと思う。だから、君が一人にならないように、君の義姉になっているかは分からないけど、ソフィーとソフィーの母親に君の面倒を見てくれるように頼んでおいた。二人とも優しくていい人だから、君にもきっとよくしてくれるはずだ。
僕がレアに泣き付かれた時は、一体何事かと思った。いきなり僕が死ぬと言ったときは、悪い夢でも見たんじゃないかと、全く信じなかった。でもそれから先に、レアの言ったことが次々に実現していくのを目の当たりにして、君に恐れを抱いた。今でもそれは悪かったと思っている。そのことを許してもらおうなんて考えていない。だって、家族に怖がられることは何よりも怖いことだと思うから。
僕は君が召喚されたときに、初めて左目のことを知った。それを埋め込まれた日のことを。
君のその目は相変わらず怖かったけれど、僕の為にその目を使ってくれていたのは感謝している。現にそのおかげで僕は君といられる時間が増えたのだから。
僕はこれから君の記憶と左目を封印して、君をこの都市から逃がす。この都市は君にふさわしくない。これが最期になるかもしれないから、僕の最期をレアに覚えておいて欲しい。
君を守ってくれる人がどこかに必ずいる。だから君はその人に出

会ったら、離れたらいけない。君の左目が神格連鎖機構である限り、いろんな所から狙われる。僕はいつまでも君の幸せを願っている。いつまでも見守っているよ、レア。

レアはその場にへたり込み、箍が外れたように泣き出した。レアの後ろから手紙をのぞき込んでいたディルクをイリヤが連れだって外に出た。

「ここから脱出するための飛行艇を、あいつらから奪ってきた。レアが落ち着いたら帰るぞ。それから、城を燃やしたのはなかなかに良い判断だった」

「あれは、意図したわけじゃないんだけど。なんであそこまで必死になってるのかも分からないし」

「空中都市はその力を誇示し続けなければならない。そうでなければ、地上都市の本当の悪が入り込んだ時に対処しきれない。そのために、力を誇示できなくなったときに、標的になる。

この場合は、象徴としての城が炎上させられた事によって、都市間会議によって不適合の烙印を押され、世代交代をさせられる事を怖れたのだろうな」

「そうなんだ」

ディルクはよく分からないといった顔をして閉口した。二人の間をしばらくの間沈黙が包んだ。ふとディルクが、ドアにもたれかかり空を見上げているイリヤに、声を掛けた。

「……何でこんな事になるんだよ」

「余計なことは考えるな。お前も休め。疲れてるから変なことを考えるんだ」

「オレがレアに左目を使うなって言わなければ、エリクは死ななくてすんだかもしれないのに」

「お前がエリクが撃たれる瞬間に間にでも入るのか？　先が見えても行動は変わらない。俺にはレアがどうやってて三年もの間、エリクを生かすことができたのか不思議なぐらいだ」

「それでも何かできたはずなんだ」
イリヤはディルクの前に移動し、胸ぐらを掴んだ。
「過ぎたことをいつまでも悩んでる暇があったら、どうやって生きるか考えろ。どうすれば生きられるか考えろ。お前はもうのうのうと生きていける場所から堕とされたんだ。今を考えろ。他のことを考える余裕は今のお前にはないはずだ」
ディルクはイリヤの言うことをおとなしく聞き入れ、下を向いた。
「……イリヤ、オレを鍛えて欲しい。少しでも長く地上で生きられるように、少しでも足を引っ張らなくてすむように」
イリヤはその言葉に対して何も言わなかった。

▽

いまだに燃える城の敷地内から出た男は、外壁に手をついて歩き始めた。男は侵入者についての悪態を吐きながら、自身を守ろうとしていた。この都市を見捨て他の都市へと移住する。現在の立場は失うが、それでもこの都市にいるままよりも遙かにましだ。
男はとある一軒の家に入った。そこに隠しておいた一人乗りの飛行艇を目に入れた時に、男の表情が引きつった。その機体の上に一人の男が寝そべっていたからだ。
「お前は誰だ？　どうやってここに入った」
寝そべっていた男は、機体から飛び降りると同時に男に向かって、声を掛けた。
「それはこちらの質問です。どうしてこんな所にいるんですか。世代交代を見届けることにしましょうよ、都王様」
「世代交代が起こるとは決まってない」
世代交代。文字通り世代が交代することである。空中都市に今いるものを全て処分し、他の空中都市から新しいものを配置する。も

ちろん人間も含まれている。たいていの人は地上に堕とされ、一部の国へ直接関与した者は、その不手際の責任を取って、クビを飛ばされる。

「そうですね。まだ確定事項ではない。世代交代ですまないかもしれませんし。でも、それならどうして、こんな非常時に逃げようとしてるんですか」

都王は懐から拳銃を取り出し、引き金を引いた。男のしていた異常に長い首巻きの垂れの部分に穴を開けた。男は首巻きに空いた穴を見て、都王を見据えた。

次の瞬間には都王が腹を押さえてうずくまっていた。首巻きの男は都王を近くで見下している。都王が右手に握っている銃を男に向けると、男は都王の手を踏みつけ、そのまま都王の手の骨を砕いた。

男におびえた都王は使い物にならなくなった手をかばいながら、這って壁際へと逃げた。しかし男はそんな都王の背中踏みつけ、動きを封じた。

「こ、殺さないでくれ、頼む、金ならいくらでも払う。だから……」

「今のあなたには何もないでしょうに」

そういって男は都王を背中から貫いた。炎の影に移った男は、まるで、背中の翼で王を貫いているかのように見えた。男はその翼についたものを振り払うかのようにはためかせた。

セカンドプロローグ

空が黄色く染まり、太陽を完全に覆い隠してしまっているこの時節。地上都市のヴァルカース周辺は乾期を迎えていた。基本的に貧しい地上都市の中でもヴァルカースは群を抜いている。それは、ヴァルカースの上空に空中都市コルスカンドが存在しているからだ。

コルスカンドは時代の最先端をい行く都市であり、多くの製品は地方空中都市に新製品として輸出されるために廃品が少なくなり、地上の技術、資材収集の要である廃品回収が不作に終わってしまうからである。

そのヴァルカースから北西の方角に少し離れた荒野を、二台のバイクが南東の方に向かって並走していた。二台とも地上で主流とされている、タイヤの代わりに磁性ユニットを取り付け、その斥力で浮遊し一定の高さを維持し走行するバイクに砂漠迷彩のカラーリングを施したものだ。二台の違いは大きな箱が乗ったサイドカーが付いているかいないかだけだ。

突如そのバイクの進行方向の地面が盛り上がり、その土が地面に落ちたのと同時に、四つの爪を持つ茶褐色の甲殻に覆われた巨大な蟹が姿を現した。そいつは巨大な爪で地面を抉り土を巻き上げた。

サイドカーが付いている方のバイクが落ちてくる砂壁の前に停止し、他方は速度を上げ砂壁を潜り抜けた。砂壁を通り抜けたバイクに狙いを定めた蟹はそれを目掛けて、二つの爪を振り下ろした。

猛攻を回避したバイクは蟹の周りを走行し、動き回る脚の一つに狙いを定めた。携えた鞘から抜いた反りの小さな刃で斬りつけ、そのまま蟹の体の下を走り抜ける。その軌跡を蟹がなぞるように四つの爪で穴を開けていった。

一度も攻撃を当てられなかった蟹は動き回る方を追うのを諦め、停止している方に狙いを定め直し、四つの爪を威嚇するように大き

く上に掲げた。蟹が停止している方のバイクに向かって、土埃を巻き上げながら走っていった。
「ちょっと、あと少し時間を稼いでください！」
「分かってる！」
刀を手にした男は蟹に向かって走り、蟹の脚の一つを切断した。蟹はバランスを崩し、砂上に大きな音を立てて倒れた。そこに砲口が向けられる。停車していたバイクの前にいつの間にか設置されていた砲台の前にいる者が点火した。
「即席だから何の保証もできません」
直後爆音が響いた。射出された砲弾が蟹の爪に命中し、粉々に破砕した。爪と脚を一つずつ失った蟹は戦意を喪失し、地面の中へと潜っていった。
「一体これで何体目だよ」
刀を携えた男が砲台を撤去している所へと移動した。
「もっと早く組み立てろよ」
「これで精一杯です。もっと早くするなら構造自体一新しないと」
男はヘルメットを外し、テンガロンハットを代わりにかぶった。体に付着した蟹の甲羅の残骸を取り除きながら、男は腰を下ろした。
「ここで、すこし休憩してから行こう。ヴァルカースまでまだ少し距離もある」
男は黙々と解体作業を続ける者にそう言って、ヴァルカースの方を向いた。
「いまはあそこにいるんだよな」
「どうせ力は貸してもらえません」
隠れている太陽は空の頂上へと移動していた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2094j/

プレイフォー

2011年12月31日00時52分発行